
DELIVERER - 天の罰體と道化の仮面 -

あべかわきなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DELIVERER - 天の髑髏と道化の仮面 -

【Nコード】

N7391B

【作者名】

あべかわきなこ

【あらすじ】

この世のすべてを解す「蒼天の瞳」を持つ女性、キセキ・アルデアスは「命あるもの」を運ぶ配達屋。彼女のアシスタントは獣人のジン。バイク型の機獣・レオに乗って、今回は長距離配達に初挑戦！！そこでやっぱりトラブル発生！？超人なのになんとなく不器用な2人のちよつとラブコメ？ちよつぴりアクション？ファンタジー！！

プロローグ

「来週、長距離配達入ったから、準備しといてね」
彼女は唐突にそう言った。

「長距離配達、ですか？」

「なんだか陸上競技みたいだなあ、と彼が思っていたところ、
うん。泊りがけだからいろいろ準備要るでしょ？」

……なんだかともないことだと、気付いてしまった。

ペペロン市に本店を置くミカロイド配達屋。その事務所の2階は男性配達員の寮でもある。女性配達員もいないわけではないが、少ないので女子寮はない。ちなみに人間、獣、プラス『命あるもの』の融合体である彼の仕事上のパートナーも女性である。

一通り荷物をまとめ終わり、一服しようとインスタントコーヒーの瓶に手を伸ばすと、もう残り粕しかなかった。今日は時間もあるので買いに出ようと部屋を出ると、向かいの扉もちょうど開いた。

「お！ ジン、今暇か？」

そうひょうきんな声で挨拶してきたのは、なかなか端正な顔立ちの、それでいて金髪もよく似合う、同僚のアレンだ。

「あー、暇といえば暇ですけど」

「コーヒーは別に急がない。これからの午後は予定も入っていない。
「ちょうどよかった。なあ今俺大掃除してんだけどさ、家具動かすの手伝ってくんね？」

それはまた季節はずれの大掃除だ。

何かあるのだから。

それをジンが口にする

「それを聞くのは野暮ってもんだぜ」

とウインクを返された。しばらくジンにはなんのことが分からなかったが、少し経ってから思いついて赤くなる。

彼の記憶によると、この顔も良く、気さくな青年はかなりのプレイボーイであった。おそらく新しい彼女を招き入れるのだろう。

と、それは置いておいて二つ返事で承諾すると、彼は人なつこい笑顔（これもまた1つの武器なのだろう）でジンを部屋に入れた。

部屋の中は随分片付いており、残すは本当に家具の移動だけといったところだった。もう場所も考えていたのか、てきぱきと彼は指示を出し、最後のベッドを動かすに至るまで、それほど時間を要さなかった。

「じゃこれが最後な、せーのっ」

という掛け声でベッドを持ち上げてずらした途端、なにかが崩れるような、ちよつとした音がした。

「あ、いけね。忘れてた」

そうアレンは呟いたが、ベッドの死角になっていたせいもありジンも気には留めず、指示された場所へ運んだ。

そして無事着地させたあと、

「ふー、ご苦労さん。なんかお礼しないとなー」

とアレンは上を向いて言った。

「いえ、いいですよ。そんな大した働きしてないし」

これは本当のことだ。だがふと思いついたように、彼の顔がにやりと笑みを浮かべる。

なにか良くないことを考えているときの顔だ。

というのもジンは常々言われているのだ。

『あいつは根っからの遊び好きよ！ ジン、あんまり深く関わって変な影響受けないでね』と。

「そこにある本、気に入ったやつ持って行っていいぜ。あ、いやもう全部持って行っていいや」

そう言ってアレンが指差したのは、さきほどベッドがあつた場所に

ある、半分崩れかかっている雑誌の一山。

その表紙を見て、ジンは思わず鼻を押さえた。

「ちよっ！ いりませんよあんな本！！ あ、あれ、グラビア雑誌とかいうやつでしょ！？」

そういうものに全く耐性のない彼は、表紙を見ただけでも気を抜くと鼻血が出そうになる。

そんな彼の様子を見て

「はは！ 青いなージンは。興味ないかー？ ああいうのは。ああ、お前にはアルディアスがいるもんない」

楽しそうに笑うアレン。

「っな！ 違っ！ キセキさんとはそんなじゃー！」

その真っ赤な反応がさらにアレンを楽しませていることにジンは気付かない。

「ははは！ お前、なんかかわいすぎるぞ。男はもつと強気でいかにやあ、いかんぜよ」

語尾はふざけてみたものの、その内容に関しては、アレンは少し本気だった。決して長い付き合いとはいえない間柄だが、今までのジンを見てきた感想としては、『ちよっとかいつは鈍すぎるのではないか』とアレンは危惧しているのだ。

いや、これはごく自然に、良心から思ったことなのだ。

それほどまでにジンはまだ、世界のほとんどを知らない少年のようだった。

（いや、最近はこれでもましになったほうだろうけどな）

最初この寮に来た時なんて、水道の蛇口のひねり方さえ分からず聞いてきたくらいなのだから。

と、その話は置いておいて、実のところジンの身長はアレンより高い。見た目も、本人は自覚していないだろうが、結構モテると自負しているアレンと匹敵、もしくはそれ以上の、少しタイプが違うが美青年の部類なのだ。

（今までちやほやされたことがないわけではなかるうに）

アレンはそう不思議に思っているが、それははずれだ。

確かに極度の恥ずかしがり屋なジンの性格も問題ではあるが、彼が世間知らずなのは『青年』と呼べる姿になるまでずっと1人、研究室に隔離されていて、人（特に女性）はもつてのほか）とはほとんど関わりを持ってこなかったからなのだ。

その理由を知っているのは、ミカロイド配達屋の社長と、彼のパートナーしかいないだろう。

（世の女共がこいつを放っておくとは思えんがなあ）

そんな込み入った事情を知らない、案外お人よしのアレンは、まったく世間知らずな彼に、アドバイスを贈ろうと決心した。

「なあジン。お前、来週アルディアスと長距離配達に出るんだよね？」

「え？ はい。ミキシカン海岸あたりまで。結構遠いですよね」

「ミキシカン！？ それってこの大陸の1番西じゃあねえか！ そりゃあ大分かかるんじゃないか？」

アレンは本気で驚いていた。無茶な依頼主もいるものだ、と。そんな遠距離を、ただでさえ運びづらい『命あるもの』を運ばせるといふのだから。

「うーん、そうですね。とばしても3日はかかって、往復で1週間くらいって、キセキさんが」

その名前が出てきたとき、ここぞとばかりにアレンはきりだした。

「ジン。お前、チャンスだとは思わないか？」

妙に神妙な面持ちでアレンは囁く。

「え？ なんですか？」

彼は無邪気な顔で返してくる。アレンは溜め息をついてから、
「がくーっ、とくるぞ！ お前は本当に男なのか！！？」

半ば本音を叫んでみる。すると

「え？ 女じゃないですよ？」

ジンは当惑した顔で真面目に答えるからたまったものではない。

「あーもー違うって！ お前は正真正銘男だってば！ っーかもし女でその美貌なら俺は迷わずお前を押し倒す！ って違ーうー！ 俺が言いたいのはそういうんじゃない！ っーかお前鈍すぎっっっ！！」

アレンが調子を壊されるほど、ジンのぼけっぷりはひどかった。が、アレンの狙い通り、ジンはしゅんとなった。

「……やっぱ僕って鈍いですか？」
しよげた子犬のように尋ねてくる。

「え、あー、うん」

ちよつとかわいそうな気がしたが、アレンは実直なところを示してみた。

「キセキさんにもよく言われるんです……はあ……」

そういえば、ジンがアレンの前で溜め息をつくのは決まって、かのキセキ・アルディアス関係の話題のときだ。

ふふん、と急に得意げになったアレンはその午後、一種の教師、もしくはアドバイザーと化したのであった。

1・白い仮面の男

その日は、とても気持ちのいい秋晴れだった。

外でバイクが止まる音を確認し、ジンは長旅の用意とは思えないほどのうすっぺらな荷物を抱え、部屋を出た。すると見計らったように向かいの扉も開いて、金髪の男が半分身を乗り出す。

「氣いつけてな、ジン。頑張ってこいよ」

につこり笑って激励するアレンに、悪意はなさそうだ。

「はい」

ジンは快くそう答え、階段を下りていった。もちろん、アレンが『頑張れ』といった内容を、半分分かっていて半分分かっていないのだが、まあ、半分分かっただけ大きな進歩といえよう。

階段を下りると、そこにはバーのようなカウンターがあるが、こここそ立派なミカロイド配達屋本店の事務所なのだ。

カウンターの内側にいる、黒ひげを蓄えた体格のいい中年の男が、この社の社長兼事務の『親父さん』だ。まさに野郎共を統括する親父的存在なのだ。そして外側にいる、サングラスをかけたショートカットの女性。

彼女こそ、ジンに名を与え、隔離された研究所から連れ出した張本人の、キセキ・アルディアスだ。

現在、ジンは彼女のボディガード兼アシスタントを務めている。

まさに仕事上のパートナーだった。

「おはよ、ジン。昨日はちゃんと早く寝た？」

彼女に声をかけられ、ジンは微笑んで

「はい、忠告どおり。キセキさんこそ昨日はネットゲーム、夜遅くまでやってないですよね？」

そう返した。

「む。やってないわよ、長距離は今回が初めてだし」

腕組をして答えるキセキ。

「はは！ ジンもなかなか言うようになったなあ。ん、ほれお2人さん、これパスな。失くすなよ」

豪快に笑ってから親父さんは2人にそれぞれ関所ゲートを通過するための万能パスポートを渡した。

「おやつさん、これ、もし失くしたらどうなるの？」

2人は普段は短距離の配達しかしたことがないため、パスをもらうのは初めてなのだ。

「失くしたらまず、目的地には辿り着けんだろうし、帰れんだろうなあ。まあ現金持つてりや別だが、この距離だ。馬鹿にならんだろ？ 再発行もできないことはないが……まあ万が一失くしたら連絡してこい。でも絶対失くすなよ！ 高いんだから！」

親父さんは大真面目に言う。

「どつちよ」

「そうですね」

笑いをこらえながら2人はパスをそれぞれポケットに仕舞い込む。あとは運ぶ品だ。

「これだ」

うやうやしく親父さんがカウンターの下から取り出したもの。それは立方体の箱に入った『命あるもの』だった。

『命あるもの』。物体でありながら命を持ち、不思議な力を兼ね備えているものをここではそう呼ぶ。これらは世界に点在するが、非常に貴重かつ高価、さらにはその未知の能力という三拍子が揃っているため、裏で不当に取引されたり、強奪の対象となりやすい。そのため移送時は特に気を使う。所在を知られてはならないものなのだ。だからこのミカロイド配達屋にも、『重要物配達専門係』というものが秘かに存在する。言ってみればこれは、『命あるもの』を運ぶ専門機関だ。

ここに任じられる配達屋は強くなくてはならない。なぜなら時に、最近裏で開発されたいい『命あるもの探知機』か何かで荷を探知

され、追っ手がつくこともあるからだ。

うまくまいてやりすごすか、戦ってやりすごすか。どちらもこの2人のタッグは経験済みだ。そして未だに、荷を奪われたことはない。その証がキセキが頭に巻いている、青いバンダナだ。これは配達屋となつて最初に与えられる、本社に限らず世界の配達屋共通のもので、荷を奪われたりして紛失するなどの失態を演じたとき、このバンダナは剥奪される。これを守っていられるということは、配達屋の誇りなのだ。

「これをミキシカン海岸沿いの古い屋敷まで届けてほしい。この屋敷は一種の『命あるもの』保管倉庫なんだ」

「……ということは国の建物？」

「ああ、そうなる。お前はサングラスかけたまま対応したほうがいいだろうな。相手もお偉いさんだろうが配達屋にそこまでとやかく言わんだろ」

ふむ、と頷くキセキ。確かに彼女が国の役員と顔を合わせるのにはまずいのだ。

「あ、保管庫ってことは尾行されたら命取りですね」

ジンが言う。

「ああそうだ。ほかのものも危険にさらされるからな。結構きついが、頑張ってくれよ？」

そついう親父さんはいつになく真剣な顔だ。

「もちろん。プロですから」

そう笑顔で、キセキは返した。

青く光るボディのバイク、のような外見の生き物『機獣』の側面に、キセキは手際よくジンの荷物を掛けた。

「ジンの荷物これだけ？ 少ないわねー」

その荷物の薄っぺらさに驚くキセキ。無理はない。1週間の荷物

がこれだけで済むはずがないのだ。たとえ洗濯したりして着まわすにしても、だ。

「あ、僕ほとんど子犬の姿でいるつもりですから。もう変わりますよ」

と言った途端、背丈のある青年の姿は消え、その姿があつた場所に黒い子犬が座っていた。

「まあそのほうが楽よね」

そう言つてキセキは子犬を抱えて、機獣・レオの前部に備え付けであるポケットに入れた。これがいつものスタイルなのだ。

「じゃ、行きますか」

エンジン音を響かせて、青い獅子は颯爽と駆けていった。

見知つた街を抜け、見知らぬ道に行く。ずっと走つたままなのはやはり疲れるといえは疲れるが、もともと彼女は走るのが好きだし、それにレオは機獣で、そんじょそこの機獣の真似ごとのバイクとは比べ物にならないくらい乗り心地がいいのだ。

「次の街で休憩ですか、キセキさん」

ポケットから顔を出して風に毛をなびかせる子犬が尋ねる。

「そうね、アプリコット市でお昼にしましょう」

キセキがそう言つと、何の前触れもなくバイクが加速した。

「うわあっ」

子犬は吹っ飛びそうになつてポケットに急いで潜る。

「ちよつとレオ！ お腹減つてんの？」

ピカピカとヘッドライトが光る。たまにこんな気まぐれがあるのが機獣の難点なのだが。

ペペロン市より大きな街、アブリコット。街は昼時で、繁華街の通りは賑やかだった。

「むー。でもあんまり賑やかなところはごちゃごちゃややこしいからもうちよつと静かなところ探そうか」

キセキは青い機獣を押して通りの端を通る。機獣も実は珍しい生き物で、素人の目には分からないが、ちよつとした物好きは一目でそれを見出す。意思があり、自ら動けるレオが奪われることはないだろうが、その後部に積んでいる荷を取られると非常に困る。

そういうわけで、表に比べると静かな裏の通りに適当なオープンカフェがあつたので外の席を陣取り、軽食を取ることにした。レオには持参しているオイルを与える。ジンも子犬の姿のほうが少量でお腹が膨らむといって、そのままキセキが分け与えたピラフをもらい、やもしまあ食べていた。

（うーん、なんとも変な光景……）

食後のコーヒーをすすりながら、キセキは一見すると妙なお供たちをじつと見ていた。ふとレオに積んでいる荷のほうを見る。

（そういえば今回の配達物は何なのかしら）

中身は開けて見ることは出来ない。だが開けずとも、彼女にはそれを見ることが出来た。サングラス越しに、じつと目を凝らして、後部に置いた荷物ボックスの白い箱を見る。

目に力を入れる。

白い箱の中にもう1つの立方体。

瞬きも忘れる。

その立方体の中には、丸い、いや、完全な球ではないなにかが見える。

（上部が丸くて、下部が細い………つて）

「!？」

驚いてサングラスを外す。もう1度荷物ボックスを凝視する。今度はさほど力を入れずとも簡単にその姿を捉えることができた。

「ぎゃあああ!？」

急に叫んで席を立ったキセキに、中にいた女性店員が驚いて窓越しに尋ねてきた。

「お客様、いかがなさいましたか？」

「あ、え、いやちよつと蜂が。すみません、はは」

とつさに嘘つぽい笑いを入れてキセキは言いつくろつた。

ところでこの時、店員は別のことに驚いていた。外の席に座る女性客が、サングラスをはずしているという変化にはすぐに気付いたのだが、その瞳が、人間の目の色とは思えないような、不思議で魅力的な色だったのだ。

蒼。

青い目の色的人是にざらにいる。ただあの蒼は、どの人の青とも違う。

たとえるならば空の蒼。

見ようによつては薄く、淡く、それでいてとても濃い色に見えるのだ。

しばらく見惚れてしまったことに気付いて、店員は赤くなって勢いよく頭を下げる。

「しっ、失礼しました！」

駆け足で去っていく店員をキセキは首をかしげながら見送った。

「なんで謝るのかな」

ジンに尋ねる。ジンにはなんとなく分かった。店員は彼女の瞳に目を奪われていたのだということを。

「そういえばキセキさんこそ何ですか？ いきなり変な声出して」

それで思い出したキセキは

「そうよ！ ちょっとジン、今回の荷物！ 中身は髑髏よ……！」
そうまくし立てた。

「髑髏お？」

子犬の顔でも、明らかに信じていない、という表情が見て取れる。
「ほんとだつて！ あの形は絶対そうよ！ 頭蓋骨よ……！」

「形はそうかもしれませんが本物の骨のほずないでしょう。『命あ

るもの』なんですから」

最後のあたりはこそつと声を潜めてジンが言う。

「あー、でも形がそれってちよつと悪趣味よ。でも確かに、そうよね。これが本物の骨だったら『命あるもの』じゃなくて、ただの怨念がこもった恨みの品になっちゃうもんねー……」

そう納得したのかキセキも小さな声でそう言った。

だが、キセキの勘は少しだけ当たることになる。まだこの時の2人が知る由もなかったが。

今回は特に配達の期限が決まっているわけではなく、急ぐ必要もないのだが、こんななものを運んでいるというだけでも気が重いの、一行は昼食を終えたあとすぐにアプリコットを出た。まあ、無駄な寄り道を仕事中にするほど愚かではない。

整備された、灰色のアスファルトの上を延々と走る。両端が塀で覆われているため景色が全く見えない。これは、正直言つてつまらない。

「この辺は都会ですからねー。もっと西に行くと面白いものがありますよ、きっと」

キセキの心中を悟つてか、ジンが言った。

「そう信じたいわねー。あー、やっぱ自分の縄張りが1番走りやすいっていうか。この辺じゃ勝手がよく分かんないのよ。交通ルール違うのかなあ」

「は？」

「あれ、なんだと思う？」

そう言つてキセキが見ているのは反対車線のほうだった。反対車線なのだから、自分達とは逆を走るものだと思うのだが、明らかにあの黒いスポーツカーは我々と同じ進行方向を走っている。

「……明らかに違反してますよね？」

ジンはポケットから顔を出してじっとその車を見つめる。黒いスポーツカーは、違反しているにも関わらず、我が物顔で横暴に走っている。幸い反対車線の車通りは少なく、事故を起こしそうな気配は当たらないが。

「やだ、ちよつとこつち見てたりしてないわよね？ もういやよ、公共の道路でデッドヒートするの」

そう言う彼女は既に何度かそれを経験している。

というより、この仕事をしていて何事もなく荷物を届けられたことはほとんどない。十回中八回は危ない目に遭うのだ。

そんな時、天の助けのようにパトカーのサイレンが聞こえてきた。だんだん近づいてくる。

「はー、誰かが通報してくれたみたいね。早く止めちゃってほしいわ」

ついにミニパトが反対車線に現れた。

「その黒い車！ 止まりなさい！ 直ちに！」

まだ若い警官が叫んでいるようだ。だが例の車は全く止まる兆しがない。

「ちよつと何やってんのかしらねー、この国じゃ警察は神様よー」

「もと警官がそう言いますか。でも大人しく捕まってほしいですね。これじゃ、とばっちりを受けかねない」

ジンの言うとおり、まだスポーツカーは自分達と同じような速度で、並ぶように走っている。

「止まりなさい！ 応援も来るぞ！」

警官のほうも焦ってきたようだ。が、警官が次の言葉を言い始める前に黒いスポーツカーはこっちの車線に割り込んできた。

「うわあつ！ ちよつと何よもう！」

ちよつとキセキ達の前方に割り込んだのだ。

「でもこれで違反じゃなくなりましたよ？」

「のんきに言ってる場合か！ 迷惑よこれじゃ！ 一発文句言つて

やるわ！」

「は？」

ジンが何か意見しようとする前に、バイクは加速して、スポーツカーに並んだ。

（自分からデッドヒートしかけてるじゃないですか！？）

並んでキセキは隣の車の中を見る。サイドウィンドウが黒いフィルターで覆われていて中の様子が覗けないようになっていた。

だが彼女になら見える。鬱陶しいのでサングラスを再び外した。そして凝視するその先には。

白い仮面をかぶった人物。その異様な様子とは裏腹に、妙なほど普通に運転している。そんな人物がふと、こちらを向いた。その仮面は、笑ったピエロのような顔をした、なんとも珍妙な、それでいて不気味な表情を浮かべている。

「ぎゃあああ！」

キセキは本日2度目の叫びを上げる。

「な、キセキさん！？ なんですかまた！」

驚いてこつちを振り返るジン。

「何ってあの運転手、変態よ絶対！ 仮面かぶってるわよピエロみたいなの……！」

半分泣きかけのキセキに呆気に取られたジンは

「……キセキさん、前から思ってたんですけど、幽霊とかそういう話、苦手ですか？」

と冷静に尋ねてくる。

「あんたのその変な落ち着きようがなんかいつつも気に食わないわ……！ ああそうよ！ 私は昔肝試しで……ああ思い出したくもない……！ つーか関わらないほうがいいわ！ さっさと逃げてやる……！」

アクセルを全開にしてスポーツカーを追い抜いた。

「ちよつとキセキさん！？ まだパトカーいるんですから速度違反にならない程度に飛ばしてくださいよ！？」

ジンが飛ばされないようにポケットの端にしがみつく。

「はん！！ サツがなんだっていうのよ！ ミニパトごときでレオに追いつくなんて無理無理！！ はははは」

「さっきまで『この国じゃ警察は神様』って言ってたのはどこの誰ですかーーーー！！」

警察の目にも留まらぬ速さで、青い機獣は彼方へ走り去った。

少し暗くなつてから、シモンヌ市にたどり着いた。案外、今日1日で随分走ったことになる。

あの仮面男を見てからものすごいスピードで走ったのだ。不思議ではない。

もともとシモンヌは宿場町で、旅館が多い。

そんなわけで、温泉宿で1泊することになった。

レオは駐車場。荷物はもちろんキセキが部屋で管理するのだが。

「はあ……なんだって髑髏君と一緒に……はあ……」

よほど『荷物が髑髏』なことが気に入らないのだろう、部屋に行くまで何度もキセキは溜め息をついた。

「なんなら僕が預かりましょうか？」

青年の姿になったジンはそう言ってくれたが、一応この役はバンダナを締めるキセキに任されている。荷物の形が怖いからといって簡単に投げ出すのはよくない。

「いや、いいわ。ありがと、ジン。厚意だけは受け取っておくわ」

と、彼女の暗い表情だったのは部屋に着くまでで、宿泊する部屋に入った途端彼女は急に元気になった。

「うわあ！　なんか素敵！　窓広ーい！　畳もいいわよねー、たまには」

「わあ」

ジンも感嘆の声を上げる。

この旅館は最近の都会ではめったに見ない、畳の部屋で、明かりやら床の間やら、何もかもがジンにとつては新鮮だった。

しかしキセキにとつてもそれは同じことだった。彼女は都会での生活が長いので、こういう造りの部屋は妙に懐かしい。

はしゃぐ少女のように彼女は窓際へ行つて外を眺めた。この宿は丘の上にあつて、見晴らしがいい。シモンヌ市がよく見渡せる。山に囲まれた、すこし田舎っぽい街ではあるが、夜空の綺麗な良い街だ。

少しばかりと彼女の部屋に上がったジンも、彼女に負けず劣らず、好奇心を隠せないでいた。じつと座布団を眺めてから座り込み、畳を撫でている。

「あーそっかー。ジンって畳見るのも初めて？」

「タタミ……ですか。変わった床ですね。でもなんだか落ち着く感じが……」

今日1日走りっぱなしで疲れているのか、ジンの目元は眠そうだ。「ジン、お茶飲む？」

キセキが部屋の隅のポットの横に置いてある籠の中から昆布茶のパックを取り出す。

「あれ、それ使っちゃっていいんですか？」

「こういう旅館で備え付けてあるやつは自由に使つていいのよ。そうね、余ったらもらつて帰りましょ」

お茶を飲んでから、何をする気も起こらないので風呂へ行くことになった。

「どっちかがこの髑髏君見てないといけないから先入ってきていいわよ、ジン」

キセキがそう言つと

「え、いいんですか？　じゃあお言葉に甘えて……ところでロテン風呂って、普通のお風呂と何が違うんですか？」

ジンはそう尋ねてきた。

ああ、とキセキは考え込む。

（ジンってば大衆浴場は初めてかー）

「外にあつてね、広いのよ、普通のより。まあ入ってみれば分かるわよ。あ、タオルは湯船に浸けちゃ駄目よ？　あと……」

正直キセキはジンのことが気にかかるのだが、まさか一緒に行つてやることもできないので、浴衣の着方と、出来る限りの忠告をした。大衆浴場にはいろいろなルールがあるのだ。

彼の背中を見送りながら、ふとキセキはひとりでに笑ってしまった。

（まるで母親みたいね。……母親なんか知らないのに）

自分の部屋に備え付けてあつた浴衣と、持参のバスセットを持つてジンは男湯の暖簾をくぐる。独特の、硫黄の臭いが鼻をつく。それに慣れるのにしばらくかかったが、脱衣所には彼以外誰もいなかったため、しばらくぼけつと突つ立っている彼を不審に思う者はいなかった。

まず平日だから、といのちもあつて客も少ないのだろう。荷物置き場を見渡した限り、今風呂に入っているのはジンのほかに1人だけのようにだった。

がらりと戸を開けると、白い湯煙。少し肌寒い気温。

なるほど、なかなか風情がある、と彼は思った。

キセキに言われたとおり、シャワー室のほうで先に体と髪を洗つてから、タオルを浸さないように湯船につかる。

「ふう」

お湯は熱いがこれもなかなかいい。外を見ると、風情ある竹垣で囲われている。それも今日の道路の塀のように高くはなく、さらにその外を見渡すにはちょうど良い高さだ。外は暗いが、自然に囲まれた静けさを感じることが出来る。明日の朝早く起きて、もう1度入ってじっくり景色を眺めるのも良さそうだ。

しばらくして、ふと思った。

確か先客が1人いるはずだ。だが湯船にもシャワーのほうにもいない。まさか沈んで……はいなかった。

見回すと、彼から見て左側の塀に擦り寄っている人影があった。

(……何してるんだろう……)

壁に何かあるのだろうか。気になったので声を掛けてみた。

「あのー、どうかしました？」

びくつと肩を震わせて、その男はこちらを見た。

「っ!？」

今度はジンが驚くほうだった。

振り返ったその男が、ピエロのような白い仮面をかぶっていたからだ。

「あ、あ、あ、あなたは黒いスポーツカーの……」
意識せずともどもってしまった。すると

「あ、いやいや怖がらないでくれたまえ青年よ、理由あってこの仮面、はずせんのだよ」

そんな言葉が返ってきた。案外落ち着いた、上品な声だ。声から判断するにはなかなか難しいが、そこまで若くもなく、年でもない声だった。

「は、はあ……。え、と、そこで何を？」

相手が仮面を付けているというほかは普通であることに少し安堵して、ジンは最初の問いを繰り返してみる。

「む。青年、それを聞くのは野暮というものだろう」

男はそう言つて、ウインク……したのかは仮面で隠れて見えないが、近しい人にこういう人がいるよなー、とジンは思い、考えを巡らせてみる。

こここのすぐ左隣は、確か……

女性用の風呂だ。

(こ、この人犯罪者ですキセキさん!!!)

「覗きは駄目ですよ！ 仮面のおじさん!!!」

ジンががばつと身を起こして怒って叫んだ。

「し、しーっ！ 聞こえてしまっではないか青年！」

人差し指を口元に当てて慌てる仮面の男。

「駄目ですってば！ キセキさんに言いつけられてるんです！！
女湯を覗こうとしてる無粋な人がいたら容赦なくやってしまえ、つて！！」

と本気で殴りこみに出そうなジンを見てしり込みしたのか、男は降参したように

「わ、分かったから！ 見ません、覗きません！ 大人しく湯船に戻るから！ 暴力反対！」

と言つて、湯船に入ってきた。

……変な気分だった。仮面の男と肩を並べて湯船に浸かるのは。

「青年、せっかくこの広い世界で、こうも偶然に巡り会い、同じ湯に浸かっているのだ。何か話をせんかね？」

突然、男がきりだした。

「はあ、構いませんが」

実のところ、ジンとしてはさっさと上がってしまいたかったのだが、この男がこの湯を去るの見届けておかないと、安心してキセキとバトンタッチができそうにないのも確かだった。

「うむ。さっき言っていたキセキさん、とは誰かね？ これか？」

男は小指を立てていきなりそういうことを尋ねてくる。その意味くらいジンも知っている。というのは、向かいの部屋のアレンがよく使うのだ。

（この人アレンさんの血縁の人だったらどうしよう）

そんなことを思いながらも

「違いますよ。仕事でお手伝いさせてもらってるんです」

今日のジンはいつものように取り乱したりはしなかった。このときばかりはアレンに少し感謝する。彼のおかげで少し耐性が出来たようだ。

「ふうん、そうか。ところで君、私が今日黒いスポーツカーに乗っ

ていたことをなぜ知っているんだ？ 私の車のサイドはこの仮面のため、人を驚かせないよう黒く覆ってあるのだが」

それを訊かれてジンははっとする。

まさか彼女がああ『蒼天の瞳』で黒いガラスを透視した、なんてことは口が裂けても言えないのだ。

「あ、偶然あの道路、僕達も走ってて、フロントから見えたんですよ」

とつさにジンは嘘をついてみた。フロントガラスは普通のものだったはずだ。

「む、そうか。なんとも奇遇だな。同じ道を走り、同じ宿へたどり着いたか」

話が逸れたことにほっとしつつ、ジンは尋ね返す。

「ていうかどうしてあんな無茶な運転してたんですか？ 反対車線を走るなんて」

「ああ、あれはだな、間違えたのだよ、本当に。はは。慣れない道は困る困る。まあよいではないか、はは」

いや、よくないだろう、とジンは呆れつつ、結局彼が警察をまいて逃げおおせていることに気がついて

（無理を通しきるあたり、この人案外キセキさんと気が合うかもしれないなあ）

そんなことを思っていた。

「して、君達はどこから来たのだ？」

やっと普通の会話になる。

「ペペロンから。あなたは？」

「私はカモミールからだ。ふむ、私のほうが長旅をしているようだな。君たちはどこへ向かう？」

ジンとしては言っているのかよく分からなかったのだ

「えーと、さらに西へ」

と、答えを曖昧にしておいた。

「おお！ 私と同じではないか！！ どうだね一緒に行かんかね！

？」

仮面の男の声は、特に企みがあつてのことではなく、ただ目指す方向が一緒なのを素直に喜んでいるものようだった。

「え、あー、いや、僕の判断ではなんとも……それに僕達バイクに乗つてて、車にはついていけませんし」

と、口では言つてみたものの、機獣のレオが車の速度に引けを取らないことも、キセキならば絶対に拒否するだろうことも、ジンには分かつていた。

「むう、そうか。残念だな。まあ方向が一緒ならばまた会つかもしれん。そのときはまた、話をしようぞ」

しかしこれといつて気を害した風でもなく、仮面の男は風呂場から去つていった。

ジンはほう、と安堵の溜め息をつく。

それから彼も湯から上がろうとして、くらりと目眩がした。

(う、これは湯あたり……………)

顔を悪くして帰つてきたジンを看てやったため、キセキが風呂へ行くのは夕食の後にお預けとなった。

2・黒い仮面の髑髏の女

夕食がキセキの部屋に運ばれてきた。ジンも食事はここで取る。このあたりで取れる山の幸、牛肉等々、豪華な食事が並んでいる。それを嬉しそうにつづいているキセキには悪い気がしたが、風呂場でのことは言っておいたほうがよい気がして、ジンはそれとなく話を出した。

「キセキさん、僕ロテン風呂で仮面の人と会ったんです」

一瞬で、キセキの動きは止まる。凍りついたという比喻が相応しい。

「……マジ……？」

驚き、そして心からげんなりした、そんな顔だった。

「ええ。何か訳あつて仮面を外せないみたいなんですけど、話してみると案外普通の人でしたよ」

このあたりはフォローを入れておこうとジンの良心が働いた。ちなみに彼が女湯を覗こうとしていたことも、あくまでキセキの気分を害さないようにするために、黙っていることにした。

「ふうん……なんなのかしらね、あの仮面。怪しいったらありやしない。何かいわくがあるのかしら。……っていうか髑髏にしてもなにしても今日はもしかしてついてないのかしら、私。はあ」

溜め息までつき出した彼女を励まそうと

「あ、キセキさん、お肉焼けてますよ。早く食べないと焦げちゃいますよ」

とジンは料理をタネにせかしてみる。

「あ、ほんとだ」

それにすんなり乗ってくれるあたり、彼女は切り替えが早くて助かる、と彼は心から思った。

食事を終え、キセキが風呂へ行く。ジンはあの仮面の男が今頃再

び風呂で覗きをしていないか心配だったが、今思えば、彼女にその心配は要らなかった。

彼女にはあの眼がある。

『蒼天の瞳』……アルディアス家の者の一部にしか受け継がれないという、遺伝子の突然変異から起こったと考えられなくもない、謎に包まれた神秘の眼。その眼は古より、この世の全てを解すと崇められ、恐れられていた。近代に入ってからモアルディアス家は国の保護下に置かれていたが、もともとはやはり古代に生きる力だったのか、年々その眼を持つ者を含め、その家自体の人数も減る一方で、ついに25年前、その血は途絶えてしまった。

この結果を数年前から予想していた国の担当者が、頼み込んで保存していたのはその当時最も若かった（それでも結構な歳であっただろう）アルディアス家の者の精子と卵。

国とてこの神秘の眼を後世に伝えていきたいと願っていたのだ。

たとえ、人の手を加えてでも。

アルディアス家が滅んでから1年後、それでも『蒼天の瞳』を持つ女子が、いわゆる試験管ベビーとして誕生した。

彼女の誕生に携わった科学者達が口々に囁いた言葉を、その子は名前にもらったことになる。

が、当の彼女に言わせると、全てを解す、なんていうことは無理らしい。そんなことをすれば脳がパンクするとかしないとか。だから彼女は自らの力を最小限に抑えているし、もしくはそれが人の身としては限界なのかもしれない、とも言っていた。

今現在、彼女が得意とするのは、眼に力を込めることによって物質という概念を取り払うこと。

つまりは透視だ。

この力は他にも応用できる。たとえば、『命あるもの』の物体の概念を取り払えば、彼らの真の姿が見えるという。

それから、これは彼女が常にサングラスをかけている理由に繋が

るのだが、意識せずとも万物の「命の光」というものが見えるらしい。全てのものに命は宿っているらしく、彼女の眼には全てが眩しく光って見える。それを軽減するためのサングラスで、2年ほど前まではそれ以上でもそれ以下でもなかったのだが、最近の彼女はサングラスを選ぶという楽しみを見出したようで、ジンは彼女の部屋に専用のコレクションボックスがあるのを知っている。

と、つまり1枚の扉越しに誰かが覗きを働こうとするものなら、彼女の蒼い眼はすぐさまそれを感知するだろうということだ。

（心配ないかな）

ジンはそう思いながらそばにある立方体に視線を移した。

彼女はこの中に髑髏らしきものが入っているといていた。それは嘘ではないだろう。彼女は冗談も言いこそすれ、悪いそれは言わないし、何しろ嘘のつけない人だった。

そういう人だということは、初めて逢った日から知っている。

彼女と出逢ったのは2年ほど前。かくいう彼も親を知らない、むしろ半分以上人間ではない異形の存在だ。

彼には半分獣の血が流れている。それ自体はよくあることではないが、自然界において、ないことはないケースだ。半人間・半獣の獣人の保護制度もきちんとこの国には整っている。

だが彼は人間の手を加えられて獣人となった身である上に、さらに『命あるもの』の1つである『最強の盾』を融合された、ある種違法な生物実験の末の、唯一の成功体なのだ。

自分がいつから人でなくなったのか、それとも最初から人ではなかったのか、それさえも彼にはよく分からない。過去の記憶は曖昧で、あの白い壁で覆われた研究室の思い出しかない。

だが2年前のある夜、その研究所の違法生物実験を知った警察の特殊部隊が潜入してきたのだ。実はこの部隊の中にキセキはいた。この時彼女は国の管理下に置かれている身だったので、安全な公務

員……どころか、危険な仕事の指折りに入る警察官になっていた。

このことに関しては彼女の観察を任されていた国の重役も頭を悩ませていたようだが、1人の人間である彼女の職業選択の自由を剥奪することもまさか出来ないので、優秀な上官をつけて彼女を秘かに守っていた。だが、その『優秀な上官』こそが警察内部に潜んでいたある結社のスパイで、キセキの眼の神秘を狙う者だった。

その夜の任務で辞職、つまり国の管理下を離れるつもりでいた彼女を手に入れようとその男は画策したわけだが、その罠の中で、キセキとジンは出逢ったのだ。

名前さえ持たなかった自分に、ジン、という、重みのあるしつかりとした響きの名前を与えてくれたのが彼女であり、彼に自由な生き方を教えてくれたのも彼女だった。

結局その晩、その男を倒して、2人はレオに乗ってそのまま古巣から旅立ってしまったわけだ。

彼のデータが研究所に残っているかもしれないが、実物がいないんじゃない、と彼女は自信ありげに彼に言った。風の噂によると、そのあたりの事後処理は彼女の元同僚の、信頼に足る者たちが行ってくれたということだった。

その後は今の通りである。彼女の転職先は民営の配達屋だった。レオを飼ってからずっと考えていた職業なのだそうだ。ジンも研究所を飛び出した時点で、彼女と共に世界を駆け巡るという夢を抱き、彼女のボディガードを務めることに同意していた。

配達屋という仕事は、これもまた危険な職業ベスト5に入るであろうといわれるもので、ボディガード兼アシスタントをつけるということはむしろ普通のことなのだ。

気付くと、キセキが風呂から帰ってきたところだった。

「監視、ご苦労であつた」

さっぱりしてご機嫌なのか、キセキのテンションは高い。

「監視つて…… そんなに厄介もの扱いしてたら髑髏君に呪われますよ？」

「う、それはいやだなあ……」

と、うなだれる彼女も浴衣姿になっていた。さすがに今はバンダナも、サングラスも外している。

いつも、彼女はそれにラフなジャケット、ジーンズのスタイルなので（それがまた飾らない彼女にこれ以上ないほど似合っているから誰も何も言わないのだが）、こういった変化はジンにとって、見ていて楽しかった。それに。

「キセキさん、浴衣似合いますね」

彼は素直に思ったことを口に出した。キセキは一瞬間聞き取れなかったように、呆けた顔をしたが、しばらくすると少し頬を紅潮させて「そ、それはどうもありがとう。ジンも似合ってるわよ」と返事した。

「じゃあ私はそろそろ髑髏君と一緒に寝るから。ジンもそろそろ休みなさい」

そついう彼女はあくまで髑髏君を気にしているらしい。自身の眼自体オカルトめいているのにその類の話に弱いというのがなんだか少し可笑しくて、ジンが顔をにやつかせていると

「なによー、なんかおかしい？」

眉を八の字にしてキセキは不満の声を上げた。

「いや、もし夜中に髑髏君が光って震えだしたら、いつでも部屋に来てくれてかまいませんから」

僕の部屋に、ということだろう。

キセキはまたしても呆気にとられる。彼がそんな大胆（というべきなのだろうか）な発言をするようになったことに驚きを隠せない。

だがいたって彼は普通ににこにこしている。恐らく自分の言動の大胆さを分かっていないのだろう。

「絶対、それはないわよ」

この時、ぷいっとそっぽを向いてぴしゃりとそう返した彼女だったが、言った当日、その言葉を覆すことになるとは思ひもなかった。

コチ、コチ、と、暗い部屋に時計の針の音だけが響いている。疲れているというのにやはり慣れない枕のせいか、すんなり寝付けない。寝返りを打って時計を見ると、実際感じたほど時は経っておらず、まだ11時すぎだった。

（あー、あいつはどこでも眠れるしなー、今頃すんなり寝てるんだろーなー）

キセキは隣の部屋に思いをはせていた。

一方、彼女にすんなり眠っていると思われる彼のほうも、実はまだ起きていた。というのも、彼が部屋に帰ると、ジャケットのポケットに入れっぱなしだった携帯電話のランプが点灯していたのだ。なんだろうと見てみると、「アレンさん」からの着信履歴が残っていた。

ジンがかけなおしてみると

「おうジン！ どうだ、旅行は」

陽気な声が楽しそうに話しかけてきた。

「旅行ってわけではないですからね、結構疲れましたよ」

ジンはぐったりした声でそう返した。それでもお構いなしに向こうは喋り続ける。

「で、どうなんだ？ 俺がアドバイスしてやったこと、いくつか試したか？」

（ああ、あの……正直どう彼女が喜ぶのかよく分からないセリフ集とか何やらのことですね）

「いえ、まだ特には。……あ、キセキさんの浴衣はお世辞じゃなく似合ってたんでちゃんと口に出して言いましたよ」

つい先刻のことだ。

「フム、よくやった。はー、なるほど。浴衣かー、浴衣。いいねえ……。羨ましいぞオイ。……じゃなくてまあまだ1日目だしな、ゆつくりやれよ。そのうち夜に自分の部屋に誘えるくらいのムードが出れば最高なんだが」

それも意識せずに先ほどしたような、ということはあえて口に出さず、ジンはただアレンがしゃべくり倒すのを聞いていた。

アレンが一体何を楽しんでいるのか、その辺が鈍くてジンにはよく分からない。

そうこうしていると、ふああ、とあくびが出てしまった。

「お、おねむかジン。せつかく俺が夜の大人の講座を開いてやろうと思ったのになあ……。いやいや、冗談だ。悪かったな。ゆつくり休んでくれ」

さすがに疲れて眠ろうとする者を邪魔するほどアレンはぶしつけな男ではない。そう謝ってすぐに電話を切った。

「ふう」

それではそろそろ眠りにつこうかと、ジンが布団に入ったその時、隣の部屋で物音がした。

キセキは明日のために眠ろうと努力した。目を閉じていればそのうち眠れると思った。

そう思った、のだが。

瞼を閉じようとしても閉じられない。それは恐らく野生の勘だった。過ごしやすい気温なのになぜか汗をかく。

恐る恐る、枕元に置いた立方体を見る。

そこには………

まさしくお化けと言っている、髑髏ならぬ骸骨が座っていた。

「……………！！！」

今回は声を上げることさえ、キセキは忘れていた。

配達責任者としての務めなど、この時はもう頭から吹っ飛んで、重要配達物であるはずの骸骨君を置いて、部屋から猛スピードで逃げ出してしまった。途中で急須か何かを蹴飛ばしたが、気に留める余裕もなかった。

ジンがその音を聞きつけて隣の部屋へ行こうと立ち上がったとき、ふすまがいい音を立てて開く。

「じ、ジン！　が、が、が、骸骨！　骸骨見ちゃった！」

それはもうひどく動転した様子でキセキは走りこんできた上、ジンの胸ぐらを掴んでぶんと揺らす。

「わ、わ、わ、分かったから落ち着いてくださいよキセキさん！！こっちが吹っ飛びかねません！！！」

「だ、ただだつて」

その時第三者の声が介入する。

「あのう」

ヒヤリとする、それでいて穏やかな声。生身の人間の声とは思えない。

キセキとジンは入り口を凝視する。

そこにいたのは、黒いピエロの仮面をかぶった、白いローブを纏う女性。

「……………！？」

2人は息を飲む。

「ね、ねえジン。あんたにも見えるの？」

「え、はい。黒い仮面の女の人が」

「……………おかしいなあ…………。あの『命あるもの』だと思っただけ……………」

『命あるもの』の真の姿を蒼天の瞳が映すとき、独特の青白い光が

灯る。その光がああ仮面の女性の周りに漂っている。

「やはりあなたは分かるんですね。私は、そう、あなた方が運んでいる髑髏君、ですわ。ほら」

上品な口調で彼女は答えた。が、そこでまた先ほどの骸骨の姿になる。

「ひい ああああ！」

ジンの腕が砕けそうな程キセキは強く抱きついていた。

「いだだだ……！ キセキさん、ちよつと痛いですってば！」

「うふふ、とか言いつつ顔が赤くなっていますわよ、そこのお方」と笑いながらまた黒仮面に白服の姿に戻る女。ジンはますます赤くなってしまった。

「だーーーーー！ 貴女私のこと怖がらせて楽しんでるでしょーーーーー！……」

キセキが涙目で訴える。

「え、ああ、そうですね。だってあまりにも面白い反応で怖がってくれるから。ほほほほ」

こいつは悪魔だ、とキセキは心の中で呟いた。

「ていうかどうしてジンにも見えるの？ 『命あるもの』の真の姿は普通の人には見えないはずでしょ？」

ジンが普通の人間でないのは確かだが、それを見ることが出来るのは『蒼天の瞳』だけのはずだ。

「それはですね、きつと私がただの『命あるもの』ではないからですわ」

そう、さりと彼女は返した。

「それはどういう？」

「そうですね、手っ取り早く言えば、私はやはり半分幽霊……というか怨霊……の部類に入るから、でしょうね」

しばし、沈黙が流れる。

「……………ジン、私夢見てるのかなあ」

と言いつつジンの頬を引っ張るキセキ。

「ひひやひや！ ひへひひゃん、ふふうほへひふんほほふへふんへふひよ！？（訳・いたた！ キセキさん、普通それ自分の頬つねるんですよ！？）」

「ほほほ、面白い方ですわねえやっぱり。とり憑いちゃおうかしらほほほ」

「ぎゃああああ」

わけも分からずジンの頬をさらに引つ張るキセキ。

「ひやひえ！！ ひやひえひえひゅひゃひゃひいひい（訳・やめ！やめてくださいいいい）」

ジンがお茶を淹れ、少しキセキが落ち着く。髑髏の女も「驚かせちゃってごめんなさいね」と言いながら正座していた。黒いピエロの仮面をかぶっていて、人を怖がらせる悪い趣味をお持ちのようだが、案外常識をわきまえている人なのかもしれない。

「で、さっきのはどういう意味なんですか？」

茶をすすっているキセキに代わってジンが尋ねる。

「ふふ、そうねえ。昔話になるけどいいかしら？」

「ええ」

すると女はひとつの物語を語りだした。

「その昔、ある陶芸家の男がいました。その男の作品は、正直全然全く売れなくて。生活にも苦しむほどになりました。だから他の仕事も始めたけれど、男はやっぱり陶芸が好きで、他の仕事をする傍ら、陶芸も秘かに続けていました。その男の作品というのが、天界をモチーフにしたものがほとんどだったのです。まあ、それにこだわらずで、どんなに数を作っても、どれも似たり寄ったりな風に見えてしまうのが売れない原因だったのですけど。それでもその男の作品に惹かれた女がいました。陶芸を習いたいと言って、彼の工房に通うようになってから、女は気付きしました。彼の作品に惹かれているのと同時に、彼の無邪気過ぎるとも言える天界への情熱、そ

の情熱を持つ彼に恋してしまったのだということに」

ここで女は一息ついた。

「……それで？」

今度はキセキが尋ねた。

「男への想いが積もり積もるようになって、ある日女は遂に自らの心中を男に告白しましたわ。ですが男はこう言いました。『私が愛するのは天のみだ。その他を愛することは出来ない。ああ、君が天使だったら良かったのに』と」

そこで女は深い溜め息をついた。キセキは腕を組んで女に尋ねた。
「……………言つていい？」

「どうぞ」

「その男、最低。ふるならもうちよつとマシな言い方できないわけ？ 特に最後の一言がムカつとくるわ」

キセキが齒に衣も着せずそう言つと、女は少し笑つたような気がした。仮面で分らないが、少し寂しそうに。

「ええ、そうですね。でも彼はそういう、子供みたいな人でした。女は悲しかったです。何日も泣き続けました。それほど愛していたのです、彼を。ですがそれが1週間、2週間、1ヶ月……と続くほどに、女の愛は捻じ曲がつて、憎しみへと変わつていきました。彼を憎んだわけではなく、神を恨みました。『どうして私を天使にしてくれなかったの』、と」

このあたりでジンは涙を浮かべていた。もろいやつだと傍目で見ているキセキも、心の中では女に感服していた。そこまでその男を愛していたのか、と。

「ふられてから半年も経たない頃、女は知りました。その男が建築作業中に事故で亡くなったということを。彼は天に召されてしまった、いえ、神に奪われてしまった、女はそう思いました。その日以来、女は憑かれたように、地獄を連想させるような作品を作るようになりました。神に背くつもりで。もともと女には素質があつて、まともな作品を作れば普通にあの男よりかは売れて、生活も出来た

のようですが、地獄をモチーフにした悪趣味な作品なんて、どんなに技巧が優れていても誰も買わない。収入も得られないのに女はやめられなくなつて、飲まず食わずで製作を続けるうち、彼女は息絶えました。女の冷たくなつた手の下には、彼女が最後に作つた壺がありました。そう、それが髑髏型の、あの品です」

「……………」

「そうですね、それからどれほど経つた頃でしょうか。いつの間にか女の魂がその壺に乗り移りました。いえ、それより先に壺のほうに『命あるもの』としての資格が与えられたのでしょうか。そのあたりは分かりません。ですが製作者の女が髑髏型の壺の、『命あるもの』の精となつたのは確かです」

女は胸に手を当ててそう言った。

「そうよねえ、覚えてるんだもんね、昔のこと」

キセキがそう言うのと女はこくりと頷いた。そこにジンがそろーっと手を挙げた。

「あのー……するとですね、気になってたんですけど、そのピエロの仮面は何かあるんですか？」

女がつけている黒いピエロの仮面。それと同じデザインで、白と黒が逆転している仮面を彼は知っている。

「え？ ああ、これ？ これは実はまた別の『命あるもの』の魂なの」

女はさらりと答えた。

「魂？ 実物じゃないってこと？」

キセキが怪訝な声を上げる。

「うーん。間違いなく本物なんだけど、実体のない『命あるもの』。物でありながら命を宿すものをそう呼ぶのなら、この世に実体を持たないこの仮面はもうそうは呼べないのかもしれないけど。もともとこの仮面は『命あるもの』として存在していた。でもその仮面が運悪く壊れてしまつて、魂だけ、それこそ幽霊ね、なぜか知らないけど私に取り憑いたのよ」

霊は霊同士でしかくっつけないということだろうか。

「あの、その仮面、もしかして対になる仮面があったりするんじゃないか」

ジンがやけに詳しく尋ねる。『命あるもの』のなかに、対になるものが多く存在するというのは周知の事実だ。

それでキセキはやつと分かった。ジンはあの、黒いスポーツカーの男のことを気にしているのだと。

「うーん、どうかしら。私もそのあたりは……でもそうね、もし対になるものがあるのなら、そちらに吸収してもらえればこの仮面、外れそうだよ」

彼女の言い振りからすると、仮面を自力で外すことが出来ないようだ。

「ねえ、てことはジン。あの男の仮面も『命あるもの』で、あの人も自力で仮面外せないからずっとつけてるのかしら」

「……そうでしょうねえ。外せるんだったらお風呂のときくらい外しますよねえ……」

女は少し黙って聞いてから

「？ 対の仮面、付けてる人がいるの？」

と、きょとんとしたように尋ねた。

「まだ確定とは言い切れませんが、それと同じような仮面を付けた人、今日この宿で見たんですよ」

ジンが答えた。

「あら、それは奇遇ね！ ぜひ会いたいわ！！ とうかお願いしてもいいかしら、面白い配達屋さんたち。私を保管庫に届ける前に、この仮面、外させてほしいの！！」

女が熱の籠った声で頼み込んできた。

だが女の仮面を向こうに吸収させたとして、女が仮面から解放されても、向こうの仮面が外れるかどうかは分からない。

「はー、なんかややこしいことになったわね……」

キセキがジンの心中も代弁してくれた。

3・追跡

結局その晩、大人しく髑髏の女は姿を隠し、キセキも部屋に戻って休むことが出来た。まあ、女の事情も分かったわけで、少しは安心して眠ることが出来たわけだ。

そして翌日の朝早く、2人は旅館の受付へ行つて、こつ尋ねた。

「あの、昨日ピエロの仮面をかぶった男の人、泊まりに来ましたよね？」

受付嬢は『ああ』という顔をして

「ええ、いらつしました」

と答えた。あれだけおかしい装いだ。内心変な客だったと思つているのだろう。

「まだこの宿にいます？」

「え、えーとですね、そのお客様でしたら今朝1番にお発ちになりましたが……」

苦笑を浮かべつつ受付嬢は答えた。

「あー、捕まんなかったかー」

キセキが頭を抱える。

「でもキセキさん、あの男の人、僕らと同じで西に行くって言つてましたから、またばったり会うかもしれないよ？」

ジンがそう言った。

「え、そうなの？　じゃあ手っ取り早く朝ごはん済ませてすぐ出るか」

そう言つて2人は部屋に戻り、食事をして、髑髏を抱えて宿を出た。駐車場ではレオがピカピカとライトを点滅させていた。走りたくてうずうずしていたのだろう。

昨日は暗くなつていて気付かなかったが、宿の周りは美しい秋の

色だった。紅葉、イチヨウが特に美しい。

「はー、やっぱり朝風呂入りたかったなー」

キセキがぼやいた。ジンが昨日の夜に露天風呂で思ったことと同じことを、彼女も考えていたようだ。

「帰りにでも寄りましようよ、また」

ジンがポケットからそう言った。

「そうね、今度はゆつくり」

キセキがそう言うその後ろから

「あらあらごめんなさいね、昨日は2人っきりの邪魔をしちゃって」と、やはり上品だがヒヤリとする声が聞こえた。

「ぎゃあああ！ いきなりしゃべらないでよ！ ってちがーう！

そう言う意味で言ったんじゃないーい！！！！」

そう叫びつつ、一行は丘をくだっていった。

段々景色が田舎めいてくる。なんせ都市圏から随分離れてきたのだ。だがキセキとしてはむしろこのほうが、味気のない高層ビルを見るよりも自然の変化があって見ていて楽しいものだった。

「でもさすがに黒いスポーツカー、見かけないわねえ」

この景色の中を走ると、あの車は恐らく目立つだろう。この青いバイクのレオでさえ、十分景色から浮いてしまうのだ。

前方に、ロτζジ風の建物が見えてきた。錆びかけの古い看板がかつていた。『食事処』と書いてあった。

「あ、あそこに休憩所みたいなのがありますね。昼ごはんがてら寄って聞いてみます？」

ジンが言った。

「そうね」

そう言って、キセキは小さな駐車場にレオを止める。他にも車が2台止まっていた。片方はこの辺の農家の人が使っていそうな軽ト

ラックだったのだが、もう一方はレオに負けず劣らずこのあたりにそぐわない、高級車だった。

店に入ると「いらつしやいませー。えーと……お2名様ですね」と中年の女性が出迎えた。さすがに子犬の姿で入りにくかったのか、ジンは入り口前で青年の姿になったのだ。

席についてメニューを見る。やはり家庭的な料理が名を連ねていた。店にはまだ、料理の匂いは漂っていない。かわりにタバコの臭いが充満している。先客の、やはり農家の格好をした老人は、昼間からビールを飲んでいる。

そしてもう1人、おそらくあの高級車の所有者だろうが、いかにも「やーさん」といった、派手な柄シャツを着込み、メニューを見ながらタバコをふかふかさせていた。

店の壁にはちゃんと『禁煙』と書いた紙が目立つように貼ってあるのだが、男はそれを完全に無視している。店員も怖くて言い出せないのか、見て見ぬ振りをしているようだ。

「……………できれば早く出たいですね」

男に聞こえないような小声でジンは言った。正直ひどく煙たくて鼻の利くジンにとってはタバコ嫌いなキセキ以上に辛いものがあるのだろう。

「そうね。じゃあ早くできそうなものを……」

そうして店の者を呼ぼうとした矢先、そのヤクザのような男が急に怒鳴った。

「おい！　ちよつと責任者、出てこいや」

「は、はい」と、か細く返事して奥から出てきたのは先ほどの中年女性。傍目でも内心びくびくしているのが分かる。

「何か？」

「あんだ、これじゃあガキ用のメニューじゃねえか？あ？　なんだ、スパゲティーやらハンバーグやら、そんなもんしかねえのか、ここは」

男はぴらぴらとメニューを振る。

「え、えーと……」

女は困っている。

「もつとましなもん出せんのかい。ステーキくらい出せや、細切れ肉のハンバーグなんか食えるか！」

それは、さすがに理不尽だろう。あまりああいう男には関わりたくなかったが、困り果てておろおろしている女性がキセキには不憫に思えた。

「あ、キセキさ……」

ジンが止める前に彼女は席を立つて、男に一声浴びせていた。

「ちよつとそこのお兄さん。そんなにメニューにけちつけるんならどつか他のところに行けばいいじゃない」

女は一瞬救われたような、そしてまたすぐに困った顔をした。ヤクザ風の男は視線をこちらに向ける。

「あ？　なんか言ったかお姉ちゃん？　聞こえなかったなー」

男は猶予をくれているつもりなのだろうが、無論、彼女にそんなものは不要だった。

「だから、とつとと失せろって言ったのよ、耳の悪いお兄さんだ」と

あー、言ってしまった……とジンは思った。

「なんだとこのアマ！」

男が立ち上がる。経営者らしき女性は軽く叫び声を上げて脇へ寄った。が、キセキは臆した様子もなく、むしろ声を一層張り上げた。「ついでに言わせてもらうけど！　ここ禁煙なの、分かる！？　煙たくって我慢できないわ！」

男がタバコを床に投げ捨てた。女性が慌てて踏み消しにかかる。

「いい度胸してんじゃねえか！　それなりの覚悟は出来てんだろくなあ！？」

「当たり前じゃない！　表に出なさいよ、相手してやるわ……！」

ジン、その荷物預けたわよ」

髑髏のことだろう。

キセキは店の外に出た。男も続いて外へ出る。
(今時こんなシチュエーションが存在するなんて)
ジンと店の中年女性は同じことを思っていた。

小さな駐車場。そこは西部劇を思わせる、戦場と化したのだった。

「あんだけ言われたんだ、女だからって容赦はしねえぜ」

「なめてると痛い目見るわよ」

強気なキセキに、はん、と鼻で笑って見せてから、男は殴りかかって来た。やはり本物のヤクザなのだろう。スピードは速い。が。

「!？」

キセキは体勢を低くしてそれを避け、それから弾丸のような勢いで捨て身のタックルをお見舞いした。

「ぐっ!？」

男は自らの車に激突。軽く脳震盪を起こして動けないようだ。

「だから言ったでしょう?」

それでも彼女は元警官なのだ。

男は顔を赤くして、懷に手をやった。

(む)

こういった輩が取り出すものといえば拳銃か刃物か。

男はナイフを取り出した。

「死んでも文句言っんじゃねえぞ!!」

男は半分狂ったようにナイフを振ってくる。

「キセキさん!!」

ジンが飛び出そうとしてきたが、キセキはそれをアイコンタクトで静止させる。彼の力は刃物相手には向かない。むしろそれなら。

キセキは腰から平たい棒状のものを取り出した。よくよく見ると、それはとても複雑な造りの、武器だ。

慣れた手つきで彼女はその棒を、銃の形に変形させた。

男が静止する。

「なんだ、それは……おもちゃか?」

男は馬鹿にしたようににやついている。確かにそう見えてもおかしくはない。が。

銃声。そして一閃。

尾を引いた弾丸は男の車に穿たれた。確かな痕を残して。

「な……！」

男の顔が真っ青になっていく。最近はヤクザでも、銃が実際使われるところなど、そうそう見るものではない。

ひやあああと、男らしからぬ悲鳴を上げて、男は車に乗り込み、そのまま東のほうへ猛スピードで逃げていった。

「やりすぎですよ、キセキさん」

ジンが溜め息をついて言った。

「だってヤッパなんか出されちゃあ、こっちも正当防衛よ」

キセキはそう言っ、銃を元の形に戻した。

「あ、あの！　ありがとうございます！！　助けてもらったお礼に、料金はいいですから、好きなものを注文してください」

中年女性は熱の籠った声でそう言ってくれた。

スパゲティとハンバーグ。結局この2つを注文したわけだが、案外いけた。都会の洒落た店のハンバーグは凝っていて、美味しいが小さい。この店の料理はこのあたりで採れる無農薬野菜を使っていると言っていたし、味もむしろ変にいじり回してなくて、素朴でおいしかった。

「あの、少しお尋ねしたいんですけど、この店の前、黒いスポーツカーとか通りませんでした？」

食後、ジンが女性に尋ねた。

「あら、スポーツカー？　ああ！　私がこのお店を開けたときに、ちょうど男の方がスポーツカーに乗って駐車場に入って来られたわ……。その、仮面をつけていて、一瞬強盗かと思ったんだけど」

女は苦笑していた。そう思わないでもいられまい。

「その方、道を探ねられて、ミキシカン市にはここからどう行けば

いいのかつて」

「ミキシカン！？ うそ、おんなじ！？」

キセキは心底驚いた。方向のみならず目指す町も同じだったとは、なんたる偶然か、と。

「なら道中で探す手間は省けましたね」

ジンは苦笑した。風呂場である時、ミキシカンへ行くとはつきり言っていたら、あの男はおそらく一緒にいこうと譲らなかっただろう。

それがよかったのか悪かったのかは、微妙なところだが。

林道の脇道に、1台の高級車が停まっている。磨き上げられたボディには、つい先ほどつけられた銃弾の跡が痛々しく残っていた。

（ちくしょうちくしょうちくしょう！！ 何者だあの女！ チャカなんぞ出しやがって！）

ヤクザ男はおもむろに携帯電話を取り出す。仲間に電話しようと思ったのだが、女相手に逃げてきたとなればこちらの面目が立たない。

（ちつ……なんかいい口実はないもんか……）

考えを巡らせていたその時、男はふと気がついた。

彼の所属する組の者に与えられる携帯電話には、『命あるもの』を感知する機能が備わっており、そして今、そのランプが点灯していることに。

（近くにお宝が！？）

思わぬ発見に男は興奮して、すぐさま地図を開いてみる。その光の点は移動していた。

（……まさか）

さきほどの女が連れれの男に預けていた荷物。普通の旅の荷にしては少し妙だった。しかも今思えばあの女、青いバンダナを巻いては

いなかったか。

（これは……ついてる）

男は思わずにやついて、本部へと連絡を入れた。

キセキたちはまた、ひたすら西に向かって走っていく。

「それにしてもあの仮面男、ミキシカンに何の用なのかしら？　ぶっちゃけあそこ、そんなにたいした目玉はないわよね」

だからこそ保管庫が存在するのだろうが。

「知り合いでもいるんでしょうか。はるばる首都のカモミールからいらしたみたいですから」

ジンはまた子犬の姿になってポケットに入っている。

「ふうん、カモミールかー、懐かしいわね……」

キセキがどこか遠い目をしてそう言った。

「え？　キセキさん、カモミールにいたんでしたっけ？」

「え、そうよ？　だってあそこに警察の本部があるわけだし、私の生まれた研究所だってそこにあるんだから」

つまりは故郷、ということになる。

「そうでしたか。なんだか微妙につながりを感じる人ですね」

仮面といい、行き先といい、故郷といい。

「ほんとにね。仮面取ったら案外知ってる人だったりして」

くすくすとキセキは笑った。

が、ふとサイドミラーに視線をやると、またしてもこの田舎の景色に溶け込まない車が映っていた。

「……あの車……」

色は微妙に違うがさっきのヤクザ男と同じ種類の車だ。

「ジン、ごめん。やっぱり大人しくしとくべきだったわね」

キセキが硬い声でそう言った。

「いえ、貴女は正しかったですよ。それに、どうしたって貴女はあ

の状況、見ない振りなんて出来なかったでしょう？」

ジンは全て悟っているように、そう答えた。

「勿論、そうね」

と、その時、横の林道からも車が出てきた。今度こそ昼間のヤクザ男の車だ。

「っ！ー！ 多勢で攻めてくる気ね」

ここはどう見ても1本道。なんとかこいつらを引き離さなければ、目的地へは行けない。

「思いつきり走りなさい！ レオ！ー！」

アクセルを全開にする。勢いよく正道から逸れていく青いバイク。
「ってまたこんなところ走るんですかああ！？」

ジンが叫ぶ。道などあるようでない、そこは林というよりはもう森だ。

だがそびえ立つ木々など気にはしない。避けようとハンドルをきらずとも、このバイクは上手に走ってくれる。

ハンドルはもはや獅子であるレオが握っているのだ。

「ちっ！ なんだあのバイク！ー！ もしかして機獣か！？」

ヤクザの仲間が叫んだ。

「逃がしてたまるか！ なに、この辺はもうボスが他の舎弟も連れて困んでるんだ。絶対逃げられっこねえ！」

そう言いながらも意地でヤクザ男は森の中へと車を滑らせた。

レオが思い切り自由に走っているので揺れはいつもの比ではない。

「キセキさん！ まだあの男追ってきてますよ！」

「しっつこいなーそういうのは嫌われるって分かってないのよね、ああいうタイプの男は！」

冗談めかして言うキセキにも、少し焦りが出てきた。

（わざわざ昼間の報復のために仲間まで呼んでここまでしないわよね……するとやっぱり……）

『命あるもの』を運んでいるとばれたのだろう。

「結構まずいことになったわね。今日中につまくまかないと。これじゃ今日は野宿だわ……」

「仕方ないですね」

昨日あれだけ贅沢したのだ。それくらいは我慢できる。
あとは荷を守らなければならない。

そうこうしていると

「まあ、大変なことになっているのね」

急に髑髏の女の声がした。

「まあね。なんとかするからちょっと大人しくしててよ」

キセキももういちいち驚かない。それだけ切羽詰ってきたということだろう。

「はいはい。まあピンチのときは言うてくださいいな。私も何かの役には立てるかもしれないし」

そういえば彼女も一応『命あるもの』だ。なにか特殊な能力があるはずだ。

「ねえ、貴女的能力って……」

とキセキが尋ねようとしたとき、後ろから鋭い音が聞こえ、何か
が右横を掠めていった。

「うつわ！ 危なっ」

サイドミラーを確認すると、あの昼間のヤクザ男が運転を仲間に
任せ、助手席からライフルを構えているのが見えた。

「手加減なしってこと！？ ジン、頼んだ！！」

キセキが叫ぶと子犬はポケットを飛び出して、キセキの肩に乗り
移った。

「次で終わりだ！」

そう豪語した男の照準は完璧だった。引き金を引く。

銃声が辺りに木霊した。

……だが、放たれたはずの弾丸は、何かにはじかれてしまった。
女の背中の直前で。

「なんだ！？ 当たらなかったのか！？」

男はもう1発放った。だが結果は同じだった。

「なんだってんだよ!？」

ジンには『最強の盾』と呼ばれる『命あるもの』の要素がある。つまり、彼を身の上に連れていければ、無敵の防弾ジャケット代わりになるのだ。

「様あ見ろつてのよ! さて、どうするかなく」

キセキは腰から例の棒状の武器を取り出す。片手だけで簡単に銃に変形させて、一気に後ろを向いて構える。

「車が可哀相だから止めてあげるわ」

そう言つて、キセキはすでに傷だらけの高級車の、タイヤに向かって発砲した。そんな体勢でも狙いは的確だった。

「ちっ!？」

車体が一気に傾き、速度が落ちる。

「ばい」

ひらひらと手を振る女を追いかけていく術は、車側にはもうなかった。

予定ルートを大きく逸れてしまった。まずはこの森を抜けなければならぬのだが……森は予想以上に深かった。

「しまったわねー、方位磁石もきかないわ。日も暮れてきたし……」
「迷ってますよねー……」

ジンはもうどうでもいいや、みたいな目で呟いた。

「は、はは……」

キセキはガクツと肩を落とした。レオが走るにもそろそろ限界だった。今降りに押している。足もそろそろ疲れてきた。

「はー。もうここで野宿ね、決定。朝明るくなってから考えましょ」

「そうですね」

ジンも納得した。

ちよつとしたスペースをさがして腰を落ち着かせる。こうなることも考えて少し前から薪となる枝を拾っておいた。それを置いて火をつける。

「はー……でもキセキさん、さっきの人たちの仲間がまだいるかもしれないよ？」

ジンがそう切り出した。

「それくらい分かってるわよ。でもこの近くにはいない。私の視界に入ったら隠れても分かるから。あと、この辺に詳しくたらこの森が迷いやすいってこと、知ってるはずよ。だからいたとしてもこの森の周り。出るときが勝負よ」

「なるほど」

火をたいてからそれを使ってちよつとした料理を作る。食材もレトルトのものや缶詰を非常用に持っていたのが幸いした。

「まあアウトドアもなかなか風情があつていいわよね」

と言いつつ缶詰の魚とレトルトのご飯を食べるキセキ。

「風情ですか……うーん……」

犬の姿でご飯に味噌汁をかけたものを食べるジン。その料理をにやんこ飯と呼ぶことを彼は知らない。

その時。

がさ……

「！？」

茂みから音がした。

「誰！？」

凝視するより先に声が出た。

しかし返ってきたのは

「あ、いや、その、怪しい者じゃないんだ……」

心底困ったような男の声だった。

両手を挙げて茂みから出てきたのは、あの、ピエロの仮面の男だった。

4・彼女の本音

「いやー、助かったよ。やはり君たちとは何か縁があるようだ」

ピエロの仮面をかぶった、どこからどう見ても怪しい男は、キセキたちと同様に火を囲んでレトルトパックのご飯と缶詰の焼肉を食べている。

食するときも男は仮面を外さない。口の部分は開閉自由のようだ。「しかし驚きましたよ。もう貴方は随分先へ行かれたと思ってました」

ジンは青年の姿になっている。

茂みから出てきた男を見た直後、この姿になったのだ。

すると男は心底嬉しそうな、安心したような声を上げて彼に握手してきたのだ。続いてキセキにも。

「うむ。私もそのつもりだったのだが、ちよいと昼食を取る場所に困ってね。最初に入ったところで強盗扱いされてしまったりとか、まあよくあることなのだが。それでやっと食べられる場所を探して済ませたのだがその後どうにも柄の悪いやつらに目をつけられてね、車を盗られてしまったのだよ」

男はよく喋った。ジンの言っていた通り、若干饒舌ではあるが普通のおじさんだ、とキセキは納得した。

なんだかこんな人が身近にいたような気さえする。

（えーと……おやつさんとか、アレんとか。あともっと前にも……うーん、思い出せない）

ひとりで考え込むキセキを傍目にジンは会話を続ける。

「車を盗られたって、この森の近くで？」

「ああ。何が始まるのやら、やけに多くの同車種の車が止まっていたね、そこをまずいかなあと思いつつ通ろうとしたらやつぱりつかまっちゃって」

ははは、と笑う仮面の男。確かに彼が乗っていた車はなかなか高

そんなスポーツカーだった。

「で、森に迷い込んだんじゃないんですか？」

「逃げ込んだ、と言ったほうが正しいね、ジン君。相手が本物のヤクザっぽかったからなあ……」

男は思い出すようにそう嘆いた。

「はあ。それはどうも、僕たちのせいでご迷惑をお掛けしたようです……」

「？」

素直に謝るジンに、男はなんのことかと首をかしげる。

キセキも溜め息をついた。おそらく森の周りを張っているのは『命あるもの』を狙うヤクザだろう。

「私たち配達屋なんです。今実は『命あるもの』を運んでいて、それで……」

キセキが仕方なく事情を説明する。男から邪気は感じられない。ならば男に迷惑をかけた分、やはり事実を説明するのが筋だろう。

「なるほど。ふむ」

男が特に怒る風もなくそう納得したかと思いきや

「……おお！ するともしや君たち、ミキシカン海岸沿いの洋館に行くのでは？」

やけに陽気に尋ねてきた。しかも凶星だ。

「え、そうですね……？」

キセキは少ししたじろいだ。

「はは！ やはりな！ 目的地まで一緒だったか！ あの時一緒に行こうともつと誘っておけばよかった！ なあジン君！」

やけに男はハイテンションだ。

「は、はあ？ そうですね」

ジンはそれについていけそうにない。

「実は私もそこに行こうとしていたんだ。この仮面を外す方法を探しに」

男はそう言った。

「え？」

キセキは男の仮面をじっと見る。仮面は、普通の仮面、だった。だが、何か異常を感じる。

「……見えない？」

キセキはもう1度、サングラスを外してその仮面を凝視する。それでも、その仮面の先にある、男の顔は透視出来なかった。

男の顔がないわけではない。その仮面が、まったくもって、眼の力を受け付けていないのだ。

「どうということ……？」

神秘的な顔でひとり呟くキセキに答えるように男は続けた。

「この仮面はね、抜け殻なんだ。今は石になっていると考えてもらっている」

「抜け殻……？ それはつまり……」

「『命あるもの』だったんだよ。だけどその命、魂が抜けてしまっている。だからこれは不完全なもの。普通の物質でもないし、『命あるもの』でもない」

男はそう言った。

「……なるほど」

だから透視できないのだ。

蒼天の瞳は物質という概念を外す。だがこの仮面はどっちつかずな領域をさまよっているのだ。

ゆえに眼の力を受け付けられない。

「その仮面、やっぱり外せないんですか？」

ジンが心配そうに尋ねる。

「ああ。この仮面の対になる仮面が壊れてしまったとき、この仮面の魂もどこかへ行ってしまったらしいということは人から聞いて知っていたんだが。この仮面にはね、願いを叶えるというジンクスがあったんだ。で、面白半分にかぶってみたのさ。すると、外せなくなってしまう……で、困っていたら同僚に、ミキシカンの保管庫の管理人がそういうものについていろいろ詳しいだろって言われ

て、休暇を使って訪ねにね」

「なるほど……。黒い仮面の器が壊れたとき、逆に白い仮面のほう
は魂が壊れてしまったということでしょうか。でもどうして自力で
外せないんでしょう」

ジンがキセキのほうを見る。

「黒いほうもそうだったわよね。もしかして、待ってたのかしら」
キセキがそう言うと、白い立方体から黒い仮面の女が出てきた。

「呼びました？」

「!？」

表情は分からないが男はひどく驚いたようだった。それはそうだ
ろう。出てきたのは間違はなく幽霊なのだから。

「え、ええと？ そちらのマドモアゼルは？」

男はそれでも必死に紳士らしくしようとしている。なかなか男ら
しいおじ様ではないかとキセキは感心した。

「はい。お初にお目にかかりますわ。私はこちらの方たちが運んで
いる品……兼それに宿る怨霊？ です」

無駄にお茶目に振舞う女にキセキは呆れた。

「あ、ああ。どうもご丁寧に。えーと、拝見する限りお嬢さん、私
とおそろいの仮面をお召しになっておられるようだが。縁を感じま
すなあ」

(……このおじさん、やるわね)

キセキは心からそう思った。

「おほほほ。お上手」

女も笑ったその時、女の仮面がふっと外れた。

ごく、自然に。

「あら」

女の、予想外の美顔に目を奪われるより先に、その顔から離れた
黒い影が男の仮面の方へと近づいたのに全員が注目する。少しため
らったように一瞬止まったが、すぐにずっと白い仮面へ入っていつ
た。

「え」

男が声を出さないうちに、仮面がずりおち……そうになったのを男はさっと支えた。まるで顔を隠すように。

「？」

その行動に疑問を感じる空気が漂ったが

「おお！ 外れた！」

とやや大げさに男が言う

「おほほほ、私のも。これで安心して保管庫に行けそうだね。なんといったって『命あるもの』の皆さんってば揃いも揃って美人らしいじゃないですか」

と女が言う。とジンはくすくすと笑い出した。つられてキセキも笑う。すると男が持つ仮面から、青白い光がこぼれ始めた。

「ん？」

今度こそキセキと、同族である髑髏の女にしか見えない、『命あるもの』の精神の姿が現れたのだ。

それは少女の姿をしていた。纏う装束は、仮面の精らしい、ピエロのような格好で、黒い仮面の精ではあるが、不気味さを全く感じさせない愛らしいものだった。

『ありがとう。私はずっと還る器に出逢える日を待っていました。白い仮面の精は消えてしまったけれど、私に場所を残してくれていた。それにたどり着くまで、髑髏の精に憑いていなければ消えてしまふところだったのです。貴女にはご迷惑をお掛けしました』

そう言つて仮面の精はぺこりと女にお辞儀する。いえいえと女は笑顔で応える。

『そして白い仮面を連れてきてくださった方も、ありがとうございます。そして配達屋さんも、ありがとうございます』

声は聞こえるのか、ジンと男もうんうんと満足そうに頷いている。「めでたしめでたし、か。えーと、じゃあ貴女も保管庫に連れて行つていいのかしら？」

キセキが仮面の精に尋ねると

『はい。できれば。仲間がいるほうが楽しいですし』
と素直に彼女はそう言った。

「あら、じゃあ私と最初のお友達になりませんか？」

髑髏の女はすかさずそう申し出た。

『ええ。喜んで』

そうこうして、髑髏の女は見事にお友達をゲットしたのだった。

真夜中。静まり返る森。ところどころでフクロウの啼く声が聞こえる。獣の声は……幸いしない。

（えーと……問題は明日ねー……あのおじさんと、あと2人も連れて行かなきゃならないんだから、失敗は許されないわ）

キセキはひとり、燃え残った薪を前に毛布を肩から羽織って、髑髏の壺が入った箱を抱えたまま明日の作戦を練っていた。

（うーん、森の出口か……でもこの地図に載ってる出口っぽいところは全部押さえられてると見て間違いないでしょうし。ていうかそもそもここがどのへんかもよく分かってないからなー……。朝イチで動いて出られそうなところから出て逃げ切るしかないか……。って結局いつもこういう計画性なしっぽいことになってジンに迷惑かけるんだよなー……。あーどうしょ……）

と悶々と考えていると、燃えかすをはさんだ向かい側で眠っていたはずの子犬姿のジンが、不意に青年の姿になった。

「うわあっ！ 何よいきなり」

キセキは思わず声を上げた。

「何って……もう遅いですよ。まだ寝ないんですか？」

ジンは妙に小声で、かつ真剣に尋ねてきた。小声なのはその隣で眠っている、解放されたにも関わらずまだ仮面をつけたままの男を気遣ったことだろう。なぜ顔を隠しているのか気にはなったのだが、見せたくないなら無理強いするのもあれなので、キセキはあえ

て透視もしなかった。

指名手配犯……などなら困るが、話をする限りそんな物騒な人でないのは勘で分かる。

「明日のことを考えてるのよー、いろいろ」

「考えなくたって明日になればどうにでもなりますよ。いつもそうだったじゃないですか」

ジンは何をいまさら、といった顔でそう言う。なんだかそれに少々腹が立ったキセキは

「あー、もう！　そうよ！　どうせいつつも考えなしに無茶してあんたによく働いてもらってるわよ！」

と、自分でも驚くほど、けんか腰になって叫んでいた。

「え、いやそういう意味じゃ……って何怒ってるんですか？」

ジンがあまりに落ち着いているせいなのか、それとも他になにかあるのか、自分でもわけも分からずキセキはさらにヒートアップしてしまった。

「別に怒ってなんかいないわよ！　あーもういいわ！　ちょっと散歩してからちゃんと寝るからほっといて！」

勢いよく立ち上がって、背を向けて早歩きで歩き出す。

「え、ちよつとキセキさん！？　今から散歩って危ないですよ！？」
彼が追いかけてきそうだったのでキセキは意識する前に駆け足になっていった。立ち上がる前に駆け出されたので、ジンも追うに追えなかった。

静まり返る森。ジンはぽつんと取り残されたような気分になった。

「……どうして怒ってるんですか……？」

ジンがひとり呟くと、突然隣で寝ていた男がむくつと体を起こした。

「うわあ！？」

これには正直ジンも驚いた。

「起きてたんですか！？　……いや、起こしちゃったんですね……」

…すみません」

最初こそ声をひそめていたものの最後のあたりなどキセキは叫んでいるに近かった。

「いやいや気にするな青年。ははは、困っとるかね？」

男は陽気にぽんぽんとジンの肩を叩く。

「えー、あー……そうですね……困ってます……。どうしてキセキさん怒ってるんでしょう」

素直に心中を語るジン。

「ふむふむ。女性の考えていることは男には全く分からんものだよ。はは、小さな女の子ならまだ分かりやすいんだがな」

男はそう、懐かしそうに言った。

「？ おじさん……あ、名前訊いてなかったですね……」
ジンはふと思い出すようにそう言った。

「ああ、いや、名乗るほどのものではない。おじさんでいいよ」

「あ、じゃあ……。おじさん、お子さんがいらっしゃるんですか？」
さっきのそれはそのように聞こえたのだ。

「ん？ いや、いないよ。実はまだ独り身でね。なに、恋の経験ならおそらく君より積んどるさ、はは」

そう言われて少しジンは赤くなる。怒っているのではなく、それは凶星だからだ。

「はは、青いなー君は。だが見ていて爽やかだ。うん」

「えーと……それは褒められてるんでしょうか？」

ジンは自信なさげにそう尋ねた。すると

「もちろんだ。私が人を褒めるのはめったにない。誇りなさい」

男はむんと胸を張っている。やはり面白い人だとジンは微かに笑った。

「へへ、それじゃあそうします。……でもキセキさんを連れ戻しに行かないと、駄目ですよね？」

ジンが立ち上がる。

「うむ。それでこそ私が見込んだ男だ」

男は、仮面でジンからは分からないが、満足げな顔で彼を送り出した。

一方、キセキはひとり、髑髏の壺入りの箱を抱えたまま、どこぞの樹にもたれかかっていた。

「あらあら、どうしましたの？ 貴女、失礼だけどあんまり悩むタイプのようには思えませんけど」

と、冗談半分少し本音で髑髏の女が出てきた。仮面もはずれているため、ぞっとする驚きももうない。

「ふふ、そうね。私はあんまり悩む人間じゃないんだけど、今回は珍しく悩んでるわね……。でも何を悩んでるのか自分でもさっぱり、分かんないのよね……。」

キセキも女の率直さに助けられて本音を喋ってみる。

すると

「ほほほ、なんだかあれね、妬いてるのかしら」

女が言う。

「妬くう？ 誰に？ 私が？」

キセキはそう声に出して尋ねてみてから、なんとなくその意味が分かった。

「ああ、そうかー。なるほど」

「あら、もうお分かりになったの？」

今度は逆に髑髏の女が意外そうに尋ねた。

「うん。なんていうのかなー。妬くっていうかそのー……。子離れできてない親みたいなの？ そんな感じかも」

キセキがそう言うと、女は軽く笑った。

「ほほ。そうね、貴女の場合、そうかもしれないわね。旅館のひと、私見てましたから。まるで貴女、母親みたいでしたものね」

女は旅館でキセキがジンになにやらいろいろと教え込んでいたの

を思い出す。見ていて微笑ましかつたとはあえて言わないが。

「でもね、ちゃんと分かってたつもり。ジンだってもう結構頼りになるって。でもそれで私、頼りすぎないかが心配なの。私自身が」

キセキは自分でも驚くほど素直に喋っていた。自分はどこかひねくれていると自覚していたほどなので、こういうことは珍しい。話し相手の同性がまわりにあまりいないというのもあるのだが。

「あら、別にいいじゃない、甘えたって。甘えるのは女の特権でしょう？ 彼ならそれくらい許してくれるわ」

女はそう言ってくれる。だが

「まあね、あいつは何にも言わずに私のこと、守ってくれるんじゃないかね……。でも……。その……」

ここにきて、キセキは急に言葉を濁した。ここから先は、ずっと前から感じていた不安で、やはりすらすらは言葉に出来なかった。「言ってごらんさいよ。聞くぐらいなら、幽霊の私にだってできるわ」

女は優しく笑っていた。改めて見るとやはり相当な美人である。

こんな女性を差し置いて、天を愛した男の気が知れない。

「私がジンを縛っちゃったんじゃないかって……彼の道、制限しちゃったんじゃないかって、思っ。初めは、まあいいのよ。でも形はどうであれ配達屋に引き込んだのはやっぱり私だし、あれから外の世界を知って、あいつにも他にやりたいことができたかもしれない、でしょ？ でも、ああいうやつだから、多分私の前からいなくなるなんてことはない……。だろうし……。っていうかそういうこと、考えもしないかもしれない。私はそれが嫌なのよ。でも、好きなこととしていいよって言える勇氣も、なんでか……。ないのよ」

キセキは息もつかずにそう告白した。なんだか少し、泣きそうな気分だった。それは罪悪感からか、それとも別の理由があるのだろうか。

だが彼女は涙を見せない。それは彼女の信条のひとつでもあるからだ。

「ふふ。そこで泣かないあたり、やっぱり貴女、強い人ね。そういうところ、結構好きよ？　今までさんざんからかってきたけど」

こちらの、やはり少しひねくれたところのあるお嬢さんも、今だけは素直になっている。

「ふふ。私が見る限り、貴女が思ってるほど彼は今の仕事を重荷に感じていないと思うわ。むしろ、楽しそうじゃない？」

キセキは運転中、常に前方を見ているため気付かないのだが、女はその代わりに、きちんと目撃していた。

かの犬が、ポケットに収まりながらも、嬉しそうにしつぽを常に振っている様子を。

「……そう？　……ふう。ありがとう。なんか聞いてもらっただけですつきりしたわ」

そこでキセキはやっと、いつもの自分に戻れたような気がした。

「いえいえ。私などでお役に立てれば」

肌寒かった空気が、少し温まったような気さえる。

「……言いそびれてただけど、貴女、すごく美人よね。羨ましいくらい」

キセキが唐突に言うとなんか少し驚いたようで、

「あらあら、突然なにを言い出すのかと思えば……まあ、有り難くお言葉は頂いておくわ」

いつものようにほほほ、と笑った。

「ところでさ、貴女はこのまま、ずっと『命あるもの』として生きていくの？　一応、怨霊なんでしょ？　成仏とか……いろいろあるじゃない」

キセキはこの女性のこれからのことを思った。

『命あるもの』たちは皆、どんな風に永い時を過ごしていくのだろう、と。

「うふふ、私のことを気にかけてくださってるのね。ええ、確かに私は半分怨霊。でももういいの。死んでから、『命あるもの』としてもう一度生を受けたんだから。最期にこの髑髏の壺に込めた願い。

それは実はもう叶っているの。あの、仮面のおじさんと同じでね」
女はウインクをした。

「？」

この意味は、さすがにキセキは分からなかった。

その時

「キセキさん」

聞きなれた声が後ろからいきなり響いた。

「わっ！ ジン！？」

振り返るとそこにはかの青年の姿があった。

「捜しましたよ。あんまり走ったら戻れなくなっちゃいますよ？」

そう言うジンはいたっていつもどおりだった。

「あ……そうね。ジン、戻る？」

それに少々ほつとしてキセキはいつもの自分に完全復帰する。

「はい、勿論。薪の匂いで分かりますから」

ジンは鼻が利くのだ。

ジンがキセキの手を掴む。なぜか、彼女はそれに一瞬戸惑ってし

まった。ジンが半ば強引に手を引いて2人は歩き出した。

「あ、ジン……」

「？ なんですか？」

彼の反応があまりに穏やかで、

「その……さつきはごめん。なんか気が立ってたみたいで」

と、キセキは素直に謝った。

「いえ」

それ以上、彼は何も言わなかった。

ところで彼は、キセキと髑髏の女の会話を、少しばかり聞いていた。割り込める雰囲気ではなかったのではらく立ち聞きしてしまったのだ。

『私がジンを縛っちゃったんじゃないかって……彼の道、制限しちゃったんじゃないかって、思ってる』

彼女はそう言っていた。

（縛る？ まさか）

今すぐにでも彼女に伝えたかったが、今言うつと立ち聞きしていたことがばれて、なんとも居心地が悪くなりそうだった。なので彼は躊躇した。

結局その日、彼は何も言えなかった。

5・配達完了

空が漆黒から薄い紺色に変わり始めた頃、いちはやく彼女達は動き出した。

「できるだけ早く外に出て、一気に突破するわよ。それでいい？」

「わかりました」

「任せるよ」

キセキの大胆な作戦にも、男達はそれぞれ了承の意を示した。

やっと木々の間隔が開いてきて、レオに乗れるほどのところへ出てきた。キセキとジンはいつものポジションで、仮面の男は荷を抱えて後部座席に座る。

「じゃあ、行くわよ」

最初からアクセルを全開にすると、レオは目覚めたかのように勢いよく走り出した。昨日あれだけ走って疲れているとは思うのだが、それを感じさせない、相変わらず機敏な動きで木々を避けて走ってくれる。

「ふはは！ 機獣という乗り物はやはりすごいなあ！まさにこの世の神秘だ！ そうは思わんかね！？ うむ、次は機獣についてのレポートを書くのも悪くはない、ははは」

男はなぜか歓喜の声を上げている。手まで振り上げそんな勢いだ。「ちよつと、ちゃんと荷物、持っってくださいよ？」

「分かっているよ、ははは」

今更ながらにジンはこの仮面の男がなんとも子供っぽい人だということに今気付いた。

「キセキさん、タバコの匂いが近いです」

前方のポケットからジンが叫ぶ。

「よし！ もうすぐ抜けるわね。ジン、頼んだ」

ジンがキセキの肩に乗り移る。

白んでいく空。夜が完全に明けようとしている。

前方に光が差ししてきた。バイクはそれにつつこんでいく。

「おりゃー……！」

思わず叫びながら森から飛び出す。飛び出した瞬間、視界に入るのは数台の黒い車。男達がわらわらと動き出したのが見えた。

「出たぞ！ 追え！！」

久しぶりに道らしい、舗装された道路を走る。ガードレール越しに海が見える一本道。

（さて、どうまくか）

「お、おい！ 後ろのやつら、銃構えてるぞ！ うわわわ」

男が声を上げた瞬間に、ひゅんひゅんと風を切るライフルの音がある。男は無駄だと知りながらも身をかがめ、背中になんとも言えない悪寒を感じていた。だが、ひとつも衝撃を感じないし、掠りもない。

男がそつと目を開けてみると。

運転手の肩に乗った子犬が相手のほうをじつと睨みつけていた。その効果なのか、弾はバイクから逸れていく。

「はは！？ なんだっていうんだ！？」

それは、男にとつても気が狂いそうな光景だった。

「ちっ！ 前から来る！」

キセキが舌打ちをして叫ぶ。黒い車が数台、囲むようにしてこちらを追い詰める。

「キセキさん、前を頼みます！ 僕は後ろを！」

「分かった」

子犬がキセキの肩から跳躍する。男の頭をも足場にして、宙へ。

「お、おい！？ 離れて大丈夫なのか！？」

男は思わず叫んでいた。

すると宙に浮かんだ子犬は、一瞬にして数倍の大きさの狼となった。

「な！？」

彼が獣人であることは昨日の時点で分かっていた。だが獣の姿が

2種類というのも珍しい。いや、もしかすると先ほどの姿は子犬ではなく子狼なのかもしれない、と男は瞬時に理解した。

「おじさん、しっかりつかまってよ!!」

息をつく暇もなく男はキセキの言葉に従った。

青い機獣は前方からの銃弾をかわしながら、撃ってくる車にありえないスピードで近づく。キセキが腰から例の武器を取り出す。

ぶん、と一振りすると、平たい棒から刃が出てきた。

実物の刃ではなく、レーザーのような切っ先だった。

その奇妙な武器で、タイヤを切り裂く。

「うわわわ」

なにが起こったのかも分からないうちに、相手はハンドルをうまくきれずに他の車や木々に激突する。

狙い通りだ。

同時に後方では狼となったジンが車のフロントガラスを次々に割る。突然の出来事に、こちらと同じような惨劇を起こす。すべてのガラスを叩き割ってから、狼は、こちらも本来ならば考えられないスピードでバイクに追いつく。

と、その時バイクのそれとは違うアクセルの音がした。

「!?!」

振り返ると、仮面のおじさんが盗られたというスポーツカーが突進してきた。フロントガラスから見えるのは目の血走った男。キセキたちが知る由もないが、彼はヤクザのボスである。

衝突する一歩手前でレオは獣らしくそれをかわしたが、片手でハンドルを握っていたキセキの身体は簡単に宙に放り投げられた。

「キセキ」

仮面の男は思わずそう叫んでいた。

「っ」

仮面の男に初めて名を呼ばれたことなど気にも出来ず、声を上げる暇もなく地に叩きつけられる衝撃に備えていた彼女の身体を、受け止める者がいた。

たくましい腕が、しかと身体を包む。

「じ、ジン!？」

青年は大きな盾を持ちながらも、彼女の体をしっかりと抱きかかえていた。

「いきますよ」

ジンはそのまま、常人離れた跳躍力でスポーツカーの頭上へと跳ぶ。長いと感じるくらいの滞空時間。

「僕は貴女の盾です。好きでやってるんですから、止めないでくださいね」

ジンは言った。

「え……」

それは、まるで昨日の苦悩を消し去るような一言。

(もしかして、昨日……)

「キセキさん!」

そう呼ばれて我に返る。スポーツカーの天井が足場のように見える。それを。

「とりゃあっ」

レーザーの刀で見事に一刀両断した。

運転席に乗っていた男はなにが起こったのかさえ分からない様子で目を回していた。車が真つ二つに割れている。

「ああ……私のブラックホース……」

かつての愛車を惜しむように眺める仮面の男。レオが止まりもしないうちにキセキはまたそれに飛び乗っていた。いつの間にやら子犬姿になったジンも、キセキの肩にとまっていた。

「君たち、やるなあ……」

車への未練は置いておいたとして、普段は饒舌の男も、この凄まじい状況に呆気にとられて、こう言うしかなかった。

「まあね。それでも青バンダナですから」

と、振り返りざまにキセキは笑った。

「ん、……あ! ちょ! キセキさん、前、前!!!」

ジンが叫ぶ。

なによ、もう、と彼女が前を向くと。

『工事中。進入禁止。』の文字。

この道は、工事途中だったらしい。道理で舗装が新しいと思ったのだ。

……………前方は、まったくもつての崖だった。

「つーか進入できないでしょおおお！」

ブレーキをかける暇もなく、青い獅子は空を飛んだ。

一瞬、なんとも言えない解放感を皆が感じた。

（はは……死ぬ前って、こんな感じ……？）

と、キセキが思った瞬間、身体がぐつと下が……らなかった。

高度の降下は、止まった。

驚くべきことに、彼女はまだハンドルを握っている。そろりと目を開けると、目の前には青空と、水平線が広がっていた。

「え……？」

間違いなく、浮いていた。ジンも、目を丸くして肩に乗っていた。後ろを見ると、ちゃんと仮面のおじさんも後ろのバーにしがみついていた。ちゃんと箱も抱えてくれている。

その箱。その箱から光が溢れていた。

「ほほほ、ほら、役に立ったでしょう？ 私も」

頭上から髑髏の女の声がする。

見上げると、そこには。

「天使……？」

白いローブが風に舞い、女神のような女の微笑。しかし広がっているのはその長いローブだけではない。彼女の背中には純白の羽根が生えていた。

「私の力は空を飛ぶこと。最期に願ったのは、やっぱり天使になりたいと、そう思ったの。神様もなかなか律儀よね。ちゃんと叶えてくださったんですもの」

いつものように笑う女。だがいつもの数倍、神々しく見える。

「あ、ああ……ありがとう。命拾いしたわ」

キセキはやつと自分のおかれた状況を理解できた。

「おお！ マドモアゼル！　なんて素晴らしいんだ！　やはり次は『命あるもの』に関するレポートのほうがいいかもしれん！！」

仮面のおじさんは相変わらずハイテンションだ。一方肩に乗っているジンはというと

「うわーすごいですよキセキさん！　バイクに乗ったまま空を飛ぶなんて、まずないですよ！」

と、しきりにしつぽを振っている。それを見て、キセキはつい笑ってしまった。

「なんですか？　何かついてます？」

「ふふ、いや、別に」

と言いつつ笑いが止まらない。それを見てジンはさらに怪訝そうな顔をする。そんな様子を見て女はキセキにそつと耳打ちした。

「ほら、ね？　彼、いつもあんなふうにしつぽ振ってたんだから。ほんとよ？」

「え、いつも？　ずっと？」

キセキは少々驚いた。

「嘘は言わないわ。さあ、このまま館へ行つてしましましょう。今なら追われる心配もないわ」

女がそう言うと、本当に鳥か何かになったように、すいーっと滑空していった。

そうして一行は、海岸沿いの、古い洋館にやつとたどり着いた。

レオを茂みに隠しておいて呼び鈴を鳴らすと、待ちかねていたかのように白いひげを生やした老人が出てきた。

「配達屋さんですな。ささ、どうぞ中に」

客間に入る。慣れない高価そうなソファで待っていると、使用人がやってきてお茶まで出てきた。

「うわー、こんな待遇初めて……」

と言いつつ喉が渴いていたので遠慮なくお茶を飲み干すキセキ。傍にいたジンも思わず苦笑する。

「はははは。よい飲みっぷりじゃ、おかわりを用意しよう、ははは。ときに、長距離は初めてと聞いておりましたが……でもさすがですあ、青バンダナは」

やけに笑いを入れる老人であったが、素直にそう褒めてもらえるとはやはり嬉しくなった。

が、少し気になることがあった。

「あの、この館……」

警備体制はどうなっているのだろうかということだ。ともかくも例のヤクザはまいてきたが、リーダーに再び引つかかってしまつては意味がないのだ。

「大丈夫。現代の輩が持っているようなリーダーの電波などを錯乱させる処置はここら一帯に施してあります。ここまでは追つてこれませんよ」

そう言うからには、かなりの自信があるようだ。おそらく空間を歪める『命あるもの』でも使っているのだろう。

「それは良かった。では荷物を……あとですね、偶然旅の途中で手に入つたものがあるんですけど……」

と、キセキは髑髏の壺を渡しながら仮面の男のほうを見る。老人は頷いて

「ああ。彼のことは電話で聞いていました。外れなくて困っていると聞いていましたが……ははは。さぞかし旅の過程では苦労されたことでしょうな、ははは」

と相変わらず妙な笑いを交えながら老人は言った。

「あ、いや。実はもう外れるんです。いろいろあつて」

と、なぜかキセキが答え、男に仮面を外すようジェスチャーを送

る。

男は焦ったようなしぐさを見せ、すこしばかり頭をかいてから、仕方なさ気に仮面に手を伸ばした。

初めてのぞいた男の顔。

案外普通、というよりもなかなか男前、と言っているだろう、そんな男の顔があらわになった。眉はしっかりとしていて、無精髭を生やしている。それでいてその瞳は優しく、目に尻が下がっていて……どこか、見覚えのある顔だった。

「……………」

じつとキセキは男の顔を眺める。

「え。ちよつとキセキさん？ あんまり素顔が普通だったからってそんなにじろじろ見たら失礼ですよ」

もつともな意見を言っているジンの言葉も、その率直さに受けて笑う老人の声も、彼女の耳を素通りしていく。見つめられているほうの男も、なんとなくせわしげにちらちらと視線をあちらこちらに飛ばしているが、別に何も言わない。むしろ何か言ってもらうのを待っているようなそぶりだ。

「もしや知り合いですか？ お嬢さん、まるで獲物を睨みつける雌豹のようじゃよははははは」

と、なにがおかしいのか分からないがとにかく愉快そうに笑っている老人。

この人を知っている、と彼女は思った。

最近ではない。ペペロンの住人ではない。

カモミールにいたときに、会っている。

この男の声も、どこか馴染みが……………

「キセキ」

男がついに、口を開いた。

「あ……………」

レオから振り落とされたときにも、彼は彼女をそう呼んだ。

「はは。分からなくても無理ないさ。最後に会ったのは……えーと、君が6歳の時だからな」

男は言った。それで彼女は確信する。

「ファンデルおじさん……」

キセキは、なんとも恥ずかしいのか嬉しいのかよく分からない気分になった。

「はは！ 覚えていてくれたか！？ あれだけ研究者がいたんだ。それでも覚えていてくれたか！ 嬉しいぞ」

それでも男は、感極まったようにキセキを抱きしめた。もともと感激しているときの行動が派手な人と分かつてはいたが、このときはそれに輪がかかっていた。

「ちよつとおじさん、きついつて……はは」

キセキのほうもなんだか笑えてきた。彼女の人生において、1番古い知人に、こうして出会っているのだから。

「あのー……どういうご関係で……？」

ジンが困ったように尋ねてきた。

「おお！ 黙っていて悪かった。私はこの子の誕生に関わった者のひとりでね、幼い頃はよく面倒をみていたんだ。ほら、お馬さんとか……おぼえてないか？」

男は嬉しそうに語りだした。

「お馬さんか……やったわねえ……。私は昔から何かに乗るのが好きだったのよ」

キセキは少々頬を赤らめながら腕組をして昔話に興じる。

「ふむ。大体のやつらが君の馬にされてへばつてたな。皆体力なしばかりだからな」

「でもおじさんの印象が強かったのって、あれのせいよきつと」

「あれ？」

「ちよつと、おじさんおぼえてないの？ あれっていったらあれよ！ あれは上のおじさん方も苦笑いだっただじゃない」

「……ああ、あれか。ははは」

ファンデルは赤くなっている。

「あれってなにかのう？」

老人もこの他愛のない会話に参戦する。

「ふふふ、おじさんてば私が初めて国立の、あの大衆浴場に行ったとき、心配しすぎてなにやらいろいろかまってるうちに女湯まで入ってきちゃったんですよ。もうそれはそれは悲鳴、非難の嵐」

「はははは！ それはおもしろい」

老人は手を叩いて喜んでいる。俗な話がどうやら好きらしい。

「はっはっはっ。その後私は覗き魔とかいうレッテルをはられてねえ、しかたないから言われるとおりの男になったというわけだよ」
そんなファンデルの発言に、キセキも老人も、揃いも揃って笑っているが、ジンは知っている。

（それ、冗談じゃないんですけど……………）

結局和やかな談笑モードに入り、国の役人であろう老人も、逸れていった別の話に熱中して、目の前にいる配達屋が現在所在不明となっているキセキ・アルディアスだということを疑っている様子はなかった。

エピソード

昼食を頂いてから、帰り支度に入る。キセキが外でレオの点検をしている時、その様子を2階のテラスから眺めていたジンに、ファンデルは声をかけた。

「ジン君」

「あ、ファンデルさん。僕達もうすぐ帰りますけど、貴方は？」

「ああ、私は知人を訪ねにミキシカンの都市部へ行くんだ。ここでお別れだね」

少し寂しげに無精髭の男は言った。

「そうですね……あの、どうして仮面が外れた後も、ずっと黙ってたんですか？ キセキさんに」

ジンは少し前から気になっていたことを尋ねる。

「いや、ほら、その、なんだか恥ずかしいじゃないか。久しぶりに会うのって。それに全く覚えられてなくても不思議じゃなかったんだが、その、ショックだし」

照れくさそうに男は笑っている。その様子は、あの森で小さな女の子の話を持ち出したときの雰囲気似ていた。

「でも、こちら半分半信半疑だったんだよ。君からキセキという名前が出たとき、まさかとは思ったんだ。でも同じ名前の人がっているかもしれないだろう？」

そうそうそんな大胆な名前を持っている人はいないだろうが、確かにまったくいないとも言いきれない。

「会って、実際間近で見たら、やっと確信できた。暗いのにサングラスをかけてたしね。あとね、仮面に願いをかけていたって言うただろう？ あれ、実はあの子にもう一度会いたいって、お願いしたんだよ。まさか、ほんとに叶っちゃうなんてね」。『命あるもの』はやはりすごく神秘的だ。……しかし女の子ってのはしばらく見ないうちに変わるもんだねえ……見違えたよ、ほんとに」

それは無理もない。彼が知っているキセキ・アルディアスは、6歳さいの小さな女の子だったのだから。

「小さい頃のキセキさんって、どんなでした？」

ジンは面白半分に訊いてみた。

「ふむ。天真爛漫で、周りの大人を振り回してばかりだったね……ってあんまり今と変わらないんじゃないかい？」

男が笑いをこらえつつ尋ねる。

「へへ、そうですね。変わらないですよ」

ジンがそう答えたところ、外からくしゃみをする音が聞こえた。ファンデルもジンも声を押し殺してくすくす笑う。ここにあの老人がいいたら声を上げて大笑いしていただろう。

「はは。でも確かにあの子はもう大人になってるよ。森で怒ってひとりでどこか行ってしまっただろう？」

「ええ……」

あの時垣間見てしまった彼女の、辛そうに独白していたときの顔をジンは思い出す。あのときの答えを、今日、さり気なく言ってみたつもりなのだが、彼女は気付いてくれただろうか？

「ああやってね、ほんと、男にはよく分からない行動に出たら、もう女の子は大人の女性なんだ」

「そうなんですか……？」

ジンはふとアレンが言っていたことを思い出す。

謎の多い女性のほうが魅力的なんだ、とか。

「でも……僕は分かってあげたいです。なんていうか、そういうの……辛そうだから」

ジンは心底そう思った。彼女には常にあの、天真爛漫な笑顔でいてほしい。彼はそう願っている。

ファンデルはしげしげとジンのその真剣な顔を眺めていた。

「ふむ。やはり君は今時にしては珍しい、誠実すぎるくらいくらいの男のようだ。それも私としては気持ち良いのだが、そうだな、もっと柔軟に考えるのも、自分を追い詰めなくていいかもしれんよ。うーん

……でも実際どうなのかね？ 君たち」

そう言われて、ぼつとジンの顔が赤くなる。

「え！？ 別に何もないですよ！？ ほんとに！！ 前に言ったじゃないですか！！」

「ははは、それは現状だろう？ 君はどう思っているんだ？」

半ば真剣に尋ねられていることぐらい、ジンにも分かる。ファンデルにとってキセキは本当に、娘のような存在なのだろう。そう考えると余計に返答に困る。

「あ、いや、その、えーと……」

と、ジンが言葉を濁している時、助け舟のように下から声がした。

「おいジン！ 準備できたわよー。そろそろ降りてらっしゃい」

ジンは手すりから少々身を乗り出して

「はーい」

とわざと元気に声を張り上げる。

1階に降りて、玄関を出ると、キセキがもうスタンバイしていた。

「ファンデルおじさん、また連絡してよ。これ私の携帯の番号」

キセキはそう言ってちぎったメモをファンデルに渡す。このときのファンデルは本当に泣きそうだった。

「ああ、ああ。君のことはちゃんと黙っておくから。自分の生きたように、生きなさい」

そう言った彼は、本当に、父親のようだった。

すると老人もあの髑髏の壺を抱えて出てきた。

「またここで会える日を楽しみにしているよ。ファンデルさんも、いつでもいらっしゃい。茶菓子くらいすぐ調達できるからね。実に君たちの話は面白かった。ふははは」

と、思い出し笑いを始める老人。そうしていると壺からあの女性も出てきた。

「本当にお世話になったわ。これから頑張つてね」

と、キセキとジンに向かって意味ありげにウィンクした。

「貴女も、これからの命、大切にしてくね」

キセキは他にもいろいろお礼が言いたかったのだが、ここでは言えなかった。でもそのもどかしそうな表情から、女はちゃんと彼女の心中を察してくれたようだ。目が合つて、そして少し笑いあう。これは心中をさらけ出しあつた女同士にしか出来ないアイコンタクトだろう。

「じゃあ、行くわね」

キセキがレオに跨る。ジンも、荷がなくなったので今回は後部座席に青年の姿で座つた。

今日ばかりは名残惜しそうに、ゆつくりと走り出す青い獅子。ジンは振り返つて、ファンデルのほうを見る。

そして、言葉にはしないが、口だけを動かして、さっき答えられなかった言葉を伝える。

ボクハ、キセキサンノコト、スキデスヨ。

ふ、と優しく笑つた男の顔が見えた。

ちゃんとした、まともな道を走る帰り道。

「あー」。やっぱ今回もいろいろ苦労したわよねー。この仕事も骨が折れる折れる」

と、首を左右に傾けながらキセキがぼやく。

「でも、やりがいのある仕事、なんでしょう？」

いつも彼女が言っている言葉になぞつてジンが後ろからそう言つた。そこでふとキセキは思いついた。

「……ジンは？」

「え？」

「ジンはどう思つてる？」

このときジンはなんとなく理解した。これも、あの、彼女の不安の延長線上にある質問なのだと。

「……楽しい、ですよ？」

それは、本音だった。決して、彼女のことを気遣った上の答えではない。

「……ふうん。そっか」

キセキは何気なくそう言ったつもりだったが、かすかに声が震えていた。

それをごまかすように、彼女は軽く空を見上げて、ただ思い、願った。

そう言ってくれば、まだ、走っていられる、と。
私も、このまま、走っていたい、と。

「あー、でもまた今回あなたに助けられちゃったわねー」

「それは僕の役目ですから気にしないでください」

ああ、そういえばそんなことを、あの時彼は口にしていたっけ、とキセキは思いつつも、あまり思い出すと恥ずかしいのでやめておくことにした。

前方に、地域を区切る境界線を示す関所^{ゲート}が見えた。

「あー、パス出さない」と

と、キセキがジャケットのポケットを探る。ジンも探す。探す。ぱんぱんと、ポケット中を探してみた。

「キセキさん、なんだかパスが見当たらないんですけど」
目が点のようになったジンは優しく語り掛ける。

「あら、奇遇ね。なんだか私のパスも見当たらないんだけど」

シヨックのあまり放心状態なのか、こちらも穏やかに、キセキは答えている。

なぜ2人ともパスをなくしたのか。考える余裕はなかったのだが、実はというと、行きに立ち寄った街中で、旅人を標的とする一種のスリに遭っていたのだ。

前の車が、チェックを終えた。

「ジン、行くわよ」

キセキが俯き加減にそう言った。

「え、どこに」

「ふははははは！ もちろん突破よ！ この関所ゲートの向こう側よ！！温泉が待ってるんだから……ねっっ！！」

車体を持ち上げ、いきなりスピードを上げたバイクは難なく関所ゲートの役員の手から逃れた。後ろから何か叫ばれているが、気にしている余裕はない。

「ちよつとおお！？ これじゃ警察に捕まっても文句言えないですよおおおお！？」

「だいじょーぶだいじょーぶ！ 捕まるようなヘマなんて、絶対しないんだから！！！！」

（だー！！ やっぱりこの人は、いつもこうなんだ！！！！）

ジンは心の中で目いっぱい叫んだ。

立派に法を犯しつつも、どこか楽しそうな2人を乗せた青い獅子は、ペペロンへの帰路に行く。

見上げる空はいつものように蒼く、どこまでも広がっていた。

エピローグ（後書き）

どうもこんにちは。はじめまして。あべかわきなこです。

今回、自分にしては珍しく、連載なんだけど連載じゃない、ライトノベル形式で長編小説を書いてみました。

「DELIVERER」という大本の話があつて、その「天の髑髏と道化の仮面」編、というわけです。

そもそもこの「DELIVERER」、高校の部活で「赤蒼の盃」「蒼天の瞳」の2編を書いて終了してしまったものです。

ちよつとその時書き足りなかったというのもあるんですが、少し失敗した感があつてやり直すつもりで今回の話を書きました。

主人公は、この世の全てを解すというすごい眼を持ちながらも、案外普通・・よりも無茶で向こう見ずなアクティブな女性・キセキ・アルディアス。

そのアシスタントで獣の血を持ち、さらに『命あるもの』の盾もその身に潜めているが、大人しめであどけなさが残る青年・ジン。この二人のなんとなく微笑ましいやり取りを中心に、仕事である配達を、どうこなしていくのかという、キャラの能力が異常なわりに案外普通なラブコメ？とちよつぴりアクション？なファンタジーです。

あと今回は髑髏のお姉さんがよく喋りました。今まではあんまり『命あるもの』に喋らせていなかったんですけれど。

困ったのが仮面なんですけど、おじさんも仮面かぶってたから表情の描写が出来ない（笑）というのが今回の難点でした。

何はともあれ無事書き終われたのですが、今回は長編ということもあり、キセキさんのちよつとした微妙な心情も入れてみたいと思います。いやあ女心って複雑ですね。

つてあんまり言えた立場ではないのですが。

書けそうだったらまた、大きな休みがあるときに別の話を書いてみ

たいと思います。

ここまで読んでくださった方（いらっしゃった方（笑・汗））、
どうもありがとうございます。

追記：2009年12月31日、悩んだ末に改稿しました。文章表
現を改めただけで内容に差異はありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7391b/>

DELIVERER - 天の髑髏と道化の仮面 -

2010年10月8日14時46分発行